# Happy of establishment

教授

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｈａｐｐｙ　ｏｆ　ｅｓｔａｂｌｉｓｈｍｅｎｔ

【Ｎコード】
Ｎ２３１２Ｍ

【作者名】
教授

【あらすじ】
今年、大学を卒業した暁彦。彼は叔父の提案で、田舎の山奥にある叔父の屋敷で働く事になった。駅で迎えを待っていると、ひとりの少女が現れた。少女は叔父の屋敷で働く侍女で、彼に言われて暁彦を迎えに来たと言う。しかし少女には人間にあるはずのない獣耳が生えていた。少女の正体は、生体兵器の失敗作「亜人種」であった。

亜人種の少女達とのふれあいを描くハートフル耳っ娘メイドフ

アンタジー。

## 第1話～出逢った少女～

《プシューー……カタンカタン……》

さっきまで乗っていた古くさい電車から降りると、電車は次の目的地へと向かい出発した。

実家から持ってきたドラムバックひとつ肩に担ぎ、無人改札駅を通る。都会では信じられない光景だが、人が少ないの田舎では当たり前の光景なのだ。ドラムバックを肩に、駅から出てきたのはひとりの青年。

「んーーっ！やっぱり都会より空気がおいしーーっ！！」

ドラムバックを地面にどさりと落とすと、両腕を真上に上げて背伸びした。

「おっ、ベンチめっけ。約束の時間までまだ余裕あるし、一休みしますか」

青年はドラムバックを引きずりながら、ベンチの位置まで歩くとそのまま腰を下ろした。

「ふぃ～」

ベンチの背もたれによしかかりながら空を仰ぎ見る。空は春先にもかかわらず、雲ひとつない快晴だった。

「大学行って、やりたいことひとつ見つけられないとは……ははっ、我ながら情けねー……」

青年は今年、通っていた大学を卒業していた。だが、やりたいことも見つからず、フリーターへの仲間入り。青年がこの田舎へ訪れたのは理由があった。

「それにしても、叔父さんの厚意は嬉しいけど、本当に俺なんかが来ちゃって良かったのかな？」

青年には叔父がいた。父親のいない青年にとって、叔父は本当の父親の様に接してくれた。ここへ来たのも、とりあえずバイトでもしようかと思っていた青年に「やりたいことが見つかるまで私の所で働くといい」と叔父が提案してくれたからだった。

「孝章（たかあき）叔父さん……元気にしてるかな？」

久しぶりの再開に待ちきれずにいた。

「あっ、あのっ！」

「へっ？」

不意に声を掛けられ、空を仰ぎ見ていた首を正面へと戻した。

「（お、女の子…？）」

視界に映ったのは　ひとりの少女。シックなワンピースに、膝上のスカート。目元が隠れてしまうくらい、深々と被った帽子から覗く、栗色のセミロングヘアが風になびく。

　青年はいきなり見ず知らずの女の子に話しかけられ、戸惑い気味に返事を返す。

「えっと、俺に何か、用かな？」

「はっ、はい！その、あの……」

緊張しているのか、少女は恥ずかしそうにもじもじした。

「きっ、霧ヶ崎（きりがさき）……暁彦（あきひこ）様、ですよね？」

「えっ！？……そう、だけど……君は？」

初対面の少女に名前を呼ばれ、驚きを隠すことが出来ない青年。

「あっ！も、申し遅れました。私、霧ヶ崎孝章様の下で使用人をさせていただいています、葉月（はづき）と申します。

今日は孝章様に仰せつかって、暁彦様のお迎えに上がりました。不束者ですが、よろしくお願いします」

そう言って深々と頭を下げる少女。

「そ、そうなんだ。こちらこそよろしくお願いします。（叔父さんの家にお手伝いさんがいるのは知ってたけど、こんな若い子までいるなんて……）」

青年もつられて頭を下げる。

「（この方が、暁彦様……孝章様に聞いていた通り、優しそうな人……）」

青年をぽけ～っと見つめる少女。

「……んと、俺、顔に何かついてる？」

「えっ！？あっ、いえっ！な、何でもないですっ！」

少女は無意識の内に青年の顔を見つめていたようだ。少女ははっと我に返り、手をぶんぶん振ってごまかした。

「そっ、それよりも！お荷物運ばせていただきますね！？」

「あっ、いいよ。一人で持てるし、それに結構重たいから」

少女は青年のドラムバックに手を伸ばす。

「大丈夫、まかせてくださいっ。私、こう見えても力持ちなん……うっ、重ぃ……」

「ほら、言わんこっちゃない」

「だ、だだ、大丈、夫。重く、なんか……ないです……」

ドラムバックを担ぎながら、あっちへフラフラこっちへフラフラ、少女の足取りは覚束無い。

「無理しないでってば」

「いえ……私の、勤め、ですから」

《もふっ、もふもふっ》

「（んっ？……気のせいか、帽子の中で何かが動いているような……？）」

確かに少女の帽子がもこもこと動いていた。

「うっ、ふっ……」

相変わらず少女の足取りは危なっかしい。

「本当に大丈夫だから。（転んだりしたら、危ないし）」

「これ、くらい……どうって、ことは……きゃっっ！！」

突然、少女はバランスを失い、体勢を崩した。

「危ないっ！」

青年は、叫ぶよりも　早く身体を動かした。

―ドタンッ！

「つつ……大丈夫？」

「あっっ！！す、すみませんっ！……私は、大丈夫です」

間一髪、青年は少女の下へと身体を潜り込ませ、抱き止めるように仰向けに倒れた。少女は帽子を落としただけで、怪我は無いようだ。

「良かった。もう、無茶したら駄目……」

青年は一瞬にして目を奪われた。そこにいたのは、とても可憐な少女だった。
　さっきまで、帽子を被っていたから気付かなかったが、まるで宝石のような、透き通る少女の瞳。つやつやとした栗色のセミロングヘア　と一緒に揺れる、獣のような耳。

「みみっ！？」

「はい？」

少女の頭を見て、驚く青年。少女は頭に手を這わせ、帽子が無いことに気付く。

「……はっ！？すっ、すみませんっっ！！……こんな、気持ち悪い物、見せてしまって……」

少女は青年からバッと素早く離れ、両手で頭に生える獣耳を　覆い隠した。

―少女は「亜人種」だった―

「（見られた……知られた……。私が、亜人種だって事……。また、嫌われる……拒絶される……）」

少女の顔から一気に血の気がひく。冷や汗を流し、身体をカタカタと小刻みに震わせる。まるで捨てられた仔猫のように……。

「っ……っ……」

「……ふぅ」

青年は立ち上がると、地面に落ちた帽子を拾い上げ、付着した土埃を払う。そして、少女の下へと歩み寄った。青年は少女にスッと手を伸ばす。

「ひっ！！」

少女は手を上げられると思ったのか、ビクッと身体を強張らせた。よほど恐い思いをしたのだろうか、目には涙を浮かべている。

—ぽふっ。

「……ぁ？」

青年は少女の頭に帽子を被せた。そして、地面に置き去りにされていたドラムバックを肩に担ぐと、少女に言った。

「何してるのさ？早く叔父さんの所へ案内してよ」

「えっ……？」

少女は何が起きたかわからないといった様に、ただ呆然と立ち尽くしていた。

「ねっ、葉月さん」

青年は少女に微笑みかける。

「うっく……ひぐっ……」

少女の目に溜まっていた涙は溢れだし、頬を幾筋も伝う。

「えぇっ！？（なんでなんでっ！？俺、なんかしたっ！？）」

突然泣きじゃくりだした少女に、青年はオロオロとうろたえる。

「ね、ねぇ……どうしたのかな……？お兄さん、何か悪いことした……？ぽんぽん痛い？」

「っく……うぅっ……ちが、います…。うれ、しくて……優し、く……された事、ない……から」

「そんな、大袈裟な……当たり前の事しただけだし」

「……そんな、こと、ないです……」

青年は子供をあやすように、少女の頭をポンポンと優しく叩いた。

「（本当に優しい人なんだ。“私たち”にも“当たり前”の事だって、言ってくれる。やっぱり、想像してた通りの人）」

少女の心の中は温かい気持ちでいっぱいになり、溢れた気持ちは涙となって頬を伝う。

「ほら、もう泣き止んで？わかった、お兄さん、コーラ飴玉あげちゃうから……えっ、サイダー派？サイダー味はちょっと……。わ～っ、待って待って……謝るから泣き止んでよ～……」

春の麗らかな、午後の日の出来事。

## 第2話～Welcome to the Happy of establis

この世には「亜人種」という生き物が存在する。それは一体、何なのか？

良く言えば「生体技術の発達」、悪くいえば「人間のエゴイズムの象徴」だろう。どちらにせよ、人間という生き物が、傲慢で自己中心的だということを証明している。

文明の発展は生活をどんどん豊かにしていった。その中で飛躍的に進化した医療文化、それには大きな要因があった。「クローン技術」である。

最初は動物から始まった。小型のマウスを初めに、次は大型のウシを複製する。実験は成功し動物の複製は完了した。

そして、次にクローン技術を用いたのは「人間」であった。人が人を複製する、しかし「人間」の実験は一度たりとも成功することはなかった。人間とは繊細な臓器が幾つも結びついて成り立っている。部分的な臓器を複製する事ができても、人間一体まるごとを複製するのは不可能だった。だが、この臓器の複製が医療技術を進化させたのだ。「人工臓器」である。

おかしな話、“治す”というよりも“取り換える”といったほうが正しいかもしれない。悪いなら“治療する”のではなく“取り換え”ればいい。いつ現れるかわからないドナーを待つ必要もなく、専用に造られた臓器なので拒絶反応を心配することもない。これが大きな要因がであった。

しかし「人間」とは欲深い生き物だ。欲を満たせば次の欲が現れる。いつまで経ってもその欲が費えることはない。人間はこのクローン技術を医療以外にも利用した。

「生体兵器」である。

意のままに操る事のできる駒が欲しい。だからと行って機械では性能が限られる。では、このクローン技術で生きた兵器を作ってみよう。多種属の動物を掛け合わせた合成獣（キメラ）や人工臓器に武器を埋め込む生体武器を造り始めた。

「もっと有能な兵器を」

「もっと強力な兵器を」

「そうだ。人間を造ることが出来ないのならば、人と動物を掛け合わせた全く新しい生物を作ってみよう」

目を覆いたくなるような暗黒の歴史が生まれてしまった。その「生体兵器」の失敗作として生まれたのが「亜人種」である。失敗作の行き着く先は決まっていた。利用価値が無くなるまで使役されるか、廃棄物として処分　されるかだ。

　この実験が公になると民間の批判が激しくなり実験は全て中止とされた。が、その頃には何百、何千の亜人種が生まれていた。政府は亜人種の扱いに困り、全てを処分するつもりだったが、ほぼ自分らと姿形の変わらぬ亜人種を見て、極度の罪悪感に苛まれた。しかも言語を話す亜人種までいる。政府は恐怖を感じ、亜人種を全て保護し、数年後には亜人種保護法を設立した。しかし、保護法が制定された後も、人間は異形な生物である亜人種を認めようとせず、酷い差別化が行われていた。そして数十年の月日が流れて、世の中が落ち着きを取り戻した頃。

◆　◆　◆　◆　◆

「ほら、もう泣くのはおしまい」

「ぐしゅ……すびばせん……」

まだ赤い鼻をぐしゅぐしゅと擦る葉月。一通り泣くと落ち着きを取り戻したようだ。

「大変、お恥ずかしい所を……お見せして、申し訳ありません、でした……」

「気にしなくていいよ」

「……はい」

項垂れる葉月、落ち込んでいないわけがない。

「それでは、屋敷まで、ご案内させていただきます……」

「うん、お願いするよ」

葉月の案内で、暁彦は田舎道を歩き始めた。

「……」

「……」

「……」

「……」

終始無言のまま歩き続ける暁彦と葉月。その沈黙に耐えかねる者が

ひとり。

「（うぉおお……何だこの沈黙は……めちゃめちゃ空気重たいぃぃ……）」

「（いきなり泣き出して、絶対変な娘だって思われてる。お話したいけど、私みたいな亜人じゃ嫌がられちゃうよね）」

各々に思いを馳せながら沈黙は続き、二人は道を歩く。

「（でも、一体何を話せばいいんだ。下手な事を言ったら傷付けちゃうかも……）」

慎重になればなるほど考えがまとまらず、時間だけが過ぎていく。取り敢えず相手の様子を伺おうと視線を送ったその時。

「っっ！？」

「ッッ！」

暁彦と葉月の視線が重なった。直ぐに二人は視線を反らした。

「（俺の馬鹿！なんで目を反らすんだよ！？余計空気が重くなったじゃないか！！）」

「……あのっ」

「！」

暁彦が自己嫌悪に陥っていると、あろうことか沈黙を破ったのは葉

月の方だった。

「“軽蔑”……しないんですか？」

「えっ……？」

葉月の質問は暁彦の予想だにしないものだった。

「なんで？」

「『なんで』って……私“亜人種”なんですよ？恐くないんですか……気持ち悪くないんですか……？」

葉月の言葉は震えていた。きっと勇気を出して一生懸命捻り出した言葉なのだろう。暁彦は出来るだけ優しく宥めるように話し始めた。

「葉月さんは自分のことそう思ってるの？」

「……私達がそう思われているのは、事実ですから……」

消え入りそうな声だった。

暁彦が実際に亜人種を見たのは葉月が初めてだった。今まで亜人種の存在はテレビや新聞で知っている程度で、自分には関係ない話だと割り切って聞き流してた。だが、こうして葉月と向かい合うとそうも言ってられない。現に、亜人種の扱いは、亜人種保護法が制定されて数年経っても、差別が無くならないという。

彼女がどう答えて欲しいのか、暁彦にはわかっていた。彼女は自分に自信を持つことが出来ないだけなのだ。暁彦は口を開く。

「ならさっ、そんな奴らには勝手にそう思わせとけばいいじゃん。何も知らないくせに、人から聞いたことをただ鵜呑みにして、信じきっているような奴はろくでなしだよ」

「……」

葉月は驚いたように目を見開いた。

「だって、俺初めて葉月さんに会ったけど、全然そんな風に思わないもん。過去に辛いことがあったかもしれないけど、“今”を大切にしようよ。ねっ、葉月さん！」

にぱっと笑った暁彦。彼の笑顔を見て、葉月は小刻み震え始めた。またもや、彼女の目に大粒の涙が溜まり始め。

「……っ……っ」

「すとーっぷ！言ったでしょ？泣くのはおしまいってさ」

「はい……はいっ……」

涙をボロボロ溢しながら、目を擦る葉月。ただいつもと違っていたのは、彼女の表情が笑顔だったこと、嬉し涙だったのだ。

「（会って間もないのに、どうしてこんなに優しくしてくれるんだろ？人に優しくされるのがこんなに温かいものだったなんて……外にもこんな人がいるんだ）」

暁彦の優しさに包まれながら、葉月は心が軽くなるのを感じた。

それからというもの、葉月は持ち前の明るさで、今朝の朝食から趣味のぬいぐるみ集めまで幅広く話してくれた。暁彦もそれが嬉しくて、さっきまでの沈黙が嘘のように会話が途切れることはなかった。

「そういや、叔父さん元気にしてる？」

「はい、変わらずお元気ですよ」

「そっか。叔父さんと会うのは久しぶりだから、嬉しくてね」

「あっ、孝章様なんですけど……」

葉月の表情が曇った。

「ええっ！！叔父さんいないの！？」

「申し訳ありません、てっきりご存知だと思ってました」

「どうりで、叔父さんじゃなくて葉月さんが迎えに来たわけだ」

「安心してください。直ぐに戻って来られると思いますので」

残念そうな暁彦、叔父との再開を心待ちにしていたに違いない。葉月も苦笑いするしかなかった。

「暁彦様っ、屋敷が見えてきましたよ」

緩やかな坂を駆け上っていく葉月。暁彦も葉月の後を追って坂を登る。そこには雄大な景色が広がっていた。鬱蒼と茂る森の中に大きく構える屋敷、その大きさは野球ドームをすっぽりと収めてしまうほど。

「あれ、おかしいな？こんなに大きかったっけ？」

叔父の屋敷に来たのは幼少の頃以来だったが、その頃に比べ屋敷明らかに大きくなっていた。

「何年か前に改築したんです、中を見たらもっと驚きますよ」

「これ以上驚くなんて想像つかないよ」

この屋敷を建てたのは孝章叔父さんだ。叔父さんは昔、クローン技術の偉大な研医だったらしい。研医を引退してからは叔父さんとその奥さんである美依（みより）叔母さんとで屋敷に暮らしていた。でも、美依叔母さんは十年前に亡くなった。元々体の弱い人で、俺も何度かしか会ったことはなかったけれど、すごく優しい人だったのを覚えている。それから叔父さんは再婚することなく、屋敷でお手伝いさんを雇って生活していたというわけだ。

暁彦と葉月は屋敷の門に辿り着いた。ブロンズ製の強固な外柵が屋敷を囲む。ふと看板に書かれている文字に気が付いた。

【Ｈａｐｐｙ　ｏｆ　ｅｓｔａｂｌｉｓｈｍｅｎｔ】

「は、はっぴー、おぶ……えすてぃ？」

「ああ、それですか？ハッピーオブエスタブリッシュメント（以後ＨＯＥ）『幸せの施設』って意味なんですよ？」

「へぇ、葉月さん物知りなんだね。（でも、なんで“施設”なんだろ？）」

「そうですかっそうですかっ♪」

《もふもふっ》

「（また帽子、もこもこさせてるし……）」

誉められて嬉しいのか照れ笑いを浮かべる葉月。帽子の中でまた獣耳を動かしていた。どうやら彼女の獣耳は感情に合わせて動くようだ。

「えへへ、といっても私も茉奈（まな）さんに教えてもらったんですけどね」

「『まな』さん？」

「とっても優しくて綺麗な人です、すぐに会えますよ」

そう言うと葉月は門の呼び鈴を押した。すぐに門のスピーカーから女の人の声が聴こえてきた。

《はい、どちら様でしょうか？》

「茉奈さん、葉月です。暁彦様をお連れしました」

《お帰りなさい、葉月ちゃん。わかったわ、今扉を開けるわね。迎えも出すからそこで待っていて》

どうやら、今スピーカー越しに葉月が話していた相手が「茉奈」という女性らしい。スピーカーが切れると、強固なブロンズ製の外柵は左右に開かれた。

「玄関って……あそこ？」

目を細めると、辛うじて屋敷の扉らしき物が見える。門から屋敷の扉までが非常に長い。

「はい。でも、大丈夫ですよ。今お車がお迎えに参りますから」

葉月の言った通り、程なくして黒い車がやって来た。自動車は暁彦と葉月の前に停止した。運転席から一人の男性が現れる。

「君が、暁彦君か？大きくなったなぁ、見違えたよ」

「えっと……」

車の男性は暁彦の事を知っているらしい。暁彦は記憶の引き出しを

開け閉めして思い出そうとする。やがてひとつの記憶を引き当てた。

「もしかして……トシ叔父さんっ！？」

「ああ、元気そうだね、暁彦君」

二人は肩を抱き、再開を喜び合った。

「んと、二人はお知り合い？」

【田口俊樹（たぐちとしき）】

愛称「トシ」さん。昔からここで専属運転手として働いていた。優しく温厚な男性。

「トシ叔父さん、ずっとここで働いてたんだね」

「中々居心地が良くてね。『カジ』や『ハル』も変わらずここで働いているよ」

「本当ですかっ！？うわぁ、懐かしいなぁ！」

「あの泣き虫小僧だった『暁坊』が、こんな立派に成長した姿を見たら、二人とも驚くぞ～」

俊樹は子供の頃の暁彦と重ね合わせているようだった。

「暁彦様、トシさんだけでなく、カジさんやハルさんまで、お知り合いだったんですね？」

「叔父さん叔母さん達には、子供の頃によく面倒見てもらってたんだ」

「さて、立ち話もなんだ。乗って乗って」

俊樹なりに気を使ってくれたのだろう。「積もる話は寛げる場所で」と、乗車するよう促した。

「屋敷までお送りしますよ、“暁坊っちゃん”」

「や、やめてくださいよぉ」

「あははっ」

三人が乗った車は屋敷に向けて発進した。

屋敷の入口で俊樹と別れると、葉月に扉の前まで案内される。門も巨大ならば扉も巨大だ、ざっと暁彦の身長の三倍はあるだろう。葉月は扉に歩み寄ると、何度かノックをする。両開きの扉は内側に開かれた。

「さぁ、どうぞ、暁彦様」

「あ、うん」

屋敷に入って度肝を抜かれた。凄すぎる、「開いた口が塞がらない」とはこう言うことを言うのだろうか。
　まず、その広さだ。そこには室内と思えぬ空間が広がっていた。次に、室内に施される美しい建築様式、豪華なシャンデリア。飾られる絵画や美術品の数々、床に敷かれた真っ赤な絨毯。暁彦は「場違いな所に来てしまった」と後悔した。

「（ここ、どこ？おうち、帰りたい……）」

屋敷のあまりの凄さに、暁彦の頭はショート寸前である。そんな暁彦にひとりの女性が歩み寄った。

「遠路遥々、お疲れ様でした。貴方様が霧ヶ崎暁彦様ですね」

「……っ……っ」

ぶつぶつと口元を動かし、明らかに様子のおかしい暁彦。

「あ、暁彦さ……」

「葉月ちゃん、大丈夫よ。私にまかせて」

暁彦の異変に気付いた葉月が暁彦に話しかけようとした時、女性はそれを止めてにっこりと微笑んだ。

「（こんな時はアレだ、素数を言って心を落ち着かせるんだ！1、3、5、7……）」

《スッ》

「ひゃっ！」

いきなり左頬に温もりを感じた暁彦、突然の事だったので間抜けな声を上げた。

「どうかされましたか？御体の具合が優れないのですか？」

目の前には心配そうな女性の顔。左頬の温もりは彼女の右手が暁彦に添えられていたからだった。

アンダーフレームの眼鏡から覗く、宝石のように透き通った灰褐色の瞳。少し垂れた目尻が、彼女の優しげな雰囲気を際立たせる。三つ編みに束ねられた漆黒の長髪も、彼女の淑やかさを表現しているようで、とても似合っていた。

「だっ、大丈夫ですっ！！」

すぐに女性から飛び退いた暁彦。彼女は不思議そうな顔をしていた。が、すぐにまた微笑んでくれた。

「そうですか、それならば良いのですが」

暁彦は跳ね上がった心拍数を落ち着かせるのに必死だった。しかし、そんな暁彦を他所に、話は進んでいく。

「改めまして、お初に御目にかかります、暁彦様。孝章様の下で使用人をさせていただいています、『茉奈』と申します。以後お見知り置きを」

ふわりと丁寧に御辞儀する茉奈。顔を上げた時の笑顔が眩しすぎて、直視することが出来ない。

「よっ、よろしく、お願い、します……」

何とか捻り出した言葉。暁彦にとって、これが精一杯の挨拶だった。

「私達は暁彦様を歓迎致します。ようこそっ！！ＨＯＥへっ！！」

茉奈が音頭を取るといつの間に集まっていたのか、使用人と思われる何百人もの老若男女が、暁彦を囲むように拍手してくれた。恥ずかしさのあまり、暁彦は苦笑いを浮かべる事しか出来ない。

「暁彦様ぁーっ！ようこそーっっ！！」

「あらあら、葉月ちゃんたら……」

歓喜余ってはしゃぐ葉月、茉奈はそんな葉月を見て微笑んだ。

「あはは……どもっ……（歓迎されてるのはわかるけど、これじゃ晒し者だよぉ……恥ずかしい）」

皆、心から暁彦を歓迎してくれたようだった。

◇　◇　◇　◇　◇

「あぅぁ〜〜……疲れたぁ〜〜……」

程なくして部屋に案内された暁彦。ソファで大の字に寝そべり、慣れない緊張に疲れ果てグッタリしていた。

《コンコンッ》

部屋の扉をノックされる。

「はいっ」

すぐに返事をして、ソファから飛び起きた。扉から聞き慣れた声がする。

「暁彦様、葉月です。シーツやタオルをお持ちしました、お部屋に入っても宜しいでしょうか？」

「どうぞ」

「失礼します」

扉が開かれると、葉月が顔を覗かせる。手にはシーツやタオルなどの生活用品を持っていた。暁彦はあることに気付いた。

「服、着替えたんだ」

「はい、ここの作業服なんですよ」

エナメルのブーツに、膝下まであるスカート。上着はアンダーシャツの上にブレザーを羽織るような形のデザインだった。頭には何も付けておらず、時おり彼女の獣耳が顔を覗かせていた。少し地味な気がするが、余計な物はなく動きやすさを追求した作業服と言える。

「へぇ、似合ってるよ」

「本当ですかっ♪」

葉月は嬉しかったのか、その場でくるっと回転した。スカートからはみ出た尻尾には鈴がついているらしく、ちりんと可愛い音が鳴った。

「（尻尾まで生えてるんだ……）」

「あっ！？すみませんっ！その、私ったら……」

暁彦の視線に気付いたのか、すぐに葉月は獣耳と尻尾を手で隠した。罰の悪そうな顔をする。暁彦はそんな葉月に優しく言った。

「大丈夫だよ、葉月さん。俺の前ではそんな事気にしなくていいから。むしろ、もっと見せて欲しいかな……」

「えっ！？」

驚いたように目を真ん丸に開いた葉月。自分の言動がおかしかった事に、暁彦は言い終えた後に気付いた。

「えっ！？あっ！！いやっ、その……ごめん、今のナシ……忘れてっ！」

「いい……ですよ？」

「ええっ！！？」

葉月からの返事は意外なものだった。恥ずかしそうにもじもじしている。

「暁彦様が、見たいというなら……いくらでも」

「えっと……じゃあ、ちょっとだけ……」

暁彦は情けない事に好奇心に逆らえず、葉月の言葉に甘える事にした。葉月に歩み寄った。

《ぱたっ、ぱたたっ》

葉月は獣耳を小刻みに動かす。そわそわして、落ち着かないようだ。

「（近くで見ると、猫みたいな耳なんだな）」

「（何だか、恥ずかしいな……）」

「触っても、いい？」

「はい……」

暁彦は葉月の獣耳に向かって手を伸ばす。暁彦の指先が獣耳へと触れる。

《ふにゅっ》

「んっ……」

指先が触れた瞬間、葉月の体がピクッと跳ねた。暁彦は慌てて手を

引っ込める。

「ごっごめん……痛かった？」

「だ、大丈夫です。ちょっと、くすぐったかっただけ……」

敏感なのか、先端に触れただけで反応してしまうようだ。暁彦は再度手を伸ばした。

「（次は優しく、そっとそっと……）」

《ふにゅ、ふにふにゅ……》

「はっ……あっ、んんっ……」

「（あったかい……）」

暁彦は葉月の頭を優しく撫でる。

「ん、んぅ……」

葉月の顔はほのかに紅潮する、暁彦に頭を預けていた。

《スッ》

「あっ……」

「ありがとう、葉月さん」

暁彦は葉月の頭から手を引っ込めた。心なしか残念そうな顔の葉月。

「……あの、もう……終わり、ですか？」

「んっ、何か言った？」

小さな声でぽそぽそ話す葉月、暁彦には聞こえなかったようだ。

「あっ！いえっ……お役に立てたのなら、幸いです……」

「うん、ありがとう」

「（もっと、撫でて欲しかったな……）」

暁彦の手の温もりの心地好さを知った葉月。暁彦をしばらく見つめていた。

◆　◆　◆　◆　◆

夕食は暁彦の歓迎会も含め、盛大に行われた。ちなみに歓迎会の行われた食堂もやっぱり広かった。テーブルに乗りきれない程の様々な料理が所狭しと並べられる。どれもこれも美味しそうだ。

「うわぁ～♪今日はまた、一段と豪勢ですねっ！」

「ふふっ、カジさんもハルさんも『倅が来るんだ』って、相当張り切っていましたから」

「『倅』か……」

トシ叔父さんもカジ叔父さんもハル叔母さんも、俺の事を本当の息子のように可愛がってくれた。茉奈の言葉を聞いた時、擽ったさを覚えると同時に愛情を感じる事が出来た。

「さぁ、召し上がって下さいませ、暁彦様」

「どれがいいですか？お取りしますよっ」

「凄く旨そうっ！！いただきますっ！！」

多種多様な料理、そのどれもが暁彦を悶絶させるほどの味だった。しかし、暁彦が料理に夢中になっているその時。

「暁坊ぉぉおおっ！！」

「ふぐッッ！！？」

後ろから伸びてきた筋肉質の腕に、ガッチリとネックホールドされた暁彦。食べ物及び空気の通行を強制遮断される。

「こんなに立派になりやがってぇ！全然顔見せやがらねぇから心配したんだぞっ！！」

「ッッ！！ッッ！！？」

青い顔で必死にタップする暁彦。そんな彼に救いの手が差し出される。

「カジ、そんくらいにしときな。暁彦が白目ひんむいてるよ」

「おぉおっ!?誰だっ!!暁坊にこんな事しやがった奴ぁ!!」

「おめぇだよ」

やっとのことで、ネックホールドから解放された暁彦。肺への空気の通行、胃への食べ物の通行を許可された。

「げほっ……カジ叔父さんっ！ハル叔母さんっ！」

【梶原茂雄（かじわらしげお）】

愛称「カジ」さん。屋敷の料理副長で厨房を一任されている。料理の腕前は折り紙付、江戸っ子染みた男性。

【江口春実（えぐちはるみ）】

愛称「ハル」さん。全ての厨房を管理する総料理長。男勝りな性格だが、根は誰よりも慈愛に満ちている。

ちなみに、孝章、俊樹、茂雄、春美の四人は幼なじみの同級生で、とても仲が良かったりする。

「大きくなったね、暁彦」

「ハル叔母さんもカジ叔父さんも元気そうで何よりです」

微笑む春実、暁彦の成長を心から喜んでくれているようだ。

「かーっ！嬉しいねぇ！あの鼻垂れ坊主だった暁坊が、こんな立派に成長しやがって……よっしゃ！！今日は宴会だっ！暁坊、飲むぞ、付き合えっ！！」

「うぇっ！？」

暁彦の肩に腕を回す茂雄。少し強引かもしれないが、それは茂雄なりの愛情表現なのだ。

「おぅっ！嬢ちゃん達っ、暁坊借りるぜ」

「あ、はい……（もっとお話したかったのに……）」

「カジさん、くれぐれも飲み過ぎには注意してくださいね」

「わーってら！ハルっ！おめぇも飲むだろ？」

「そうさね、今日ぐらいは付き合ってやるよ」

「うっし！あとはトシの野郎だなっ！」

嬉しそうにする茂雄、昔からこの人は酒好きだった気がする。

「孝章も今日ぐらいはどうにかならなかったのかね……暁彦が来るって言うのにさ」

「彼奴は彼奴なりの考えがあるんだろうさ、昔からそういう奴だったろ？」

「帰って来たら“駆け付け一升”だ」

「がははは っ！！そりゃあいいわっ！！」

「（孝章叔父さん、二人が恐ろしい事言ってます……そして俺も生け贄に……）」

そんな事を思いながら、暁彦は茂雄に引き摺られて行く。葉月と茉奈はその光景を苦笑いを浮かべていた。

◇　◇　◇　◇

「おぇっ……き、気持ち悪……」

何とか茂雄達から脱け出す事が出来た暁彦。茂雄達の宴は未だ続いているに違いない。案の定、体内に許容範囲以上のアルコールを摂取した……いや、させられた暁彦。肉体の全ての機能は、摂取したアルコールを分解するためフル稼働中であった。意識を保つのが精一杯の状態である。

「う、みず……」

今、暁彦は水を飲むため、洗面所を目指していた。しかし、暁彦は今日ここへ来たばかりで、さらにこの屋敷は物凄く広い。その上、暁彦は泥酔しきっていた。洗面所にたどり着けるわけもなくその場に力尽きて倒れてしまった。

「ぅ……すぅ……すぅ……」

すぐに睡魔に襲われ、寝息を発て始めた。そこへひとつの人影が通りかかる。

「……あらあら」

床に寝そべる暁彦を　見つけ、にっこりと微笑んだ。

「んっ……」

額に何か冷たい感触を感じて意識を取り戻す。

「（冷たくて、気持ちいい……）」

それが濡れタオルだと気付くのに時間はかからなかった。誰かが乗せてくれたのだろう。

「（うっ……あ、頭痛ぇ……）」

まだまだアルコールは分解はされておらず、二日酔いの症状が現れていた。

「お目覚めですか？」

ふと、聞こえた声。うっすらと目を開けると、そこには見知った顔があった。

「良かった。気が付かれましたね、具合はどうですか？」

「あれ……茉奈、さん」

暁彦と視線が合うと彼女は微笑んでくれた。

「暁彦様は廊下で倒れていたんですよ。御部屋に御運びしようと思ったのですが、暁彦様の御部屋は遠くでしたので、私の部屋へ運ばせて頂きました」

「そっか、俺叔父さん達と飲んでて……」

廊下で倒れていた暁彦を、偶然通りかかった茉奈が介抱してくれたらしい。

「すみません、茉奈さん……ご迷惑、お掛けしました……」

「ふふ、お気になさらないでください。具合が良くなるまで、ここで休んでいくといいですよ」

月明かりに照らし出された茉奈の顔は、下ろした長髪や眼鏡をしていないせいもあって、昼間会った時よりも大人びて見えた。彼女の髪は湿っており、柑橘系の甘い匂いがする。風呂上がりだったのだろう、寝間着姿だった。

「（茉奈さんは、いつもニコニコ微笑んでて、近くにいると癒されるな……ん？）」

何かに気付いた暁彦。先ほどから後頭部に温かくて柔らかな感触を感じるのだ。そして暁彦の真上にある茉奈の顔、やけに近くに感じる。

「わっ！！」

慌てて飛び起きた暁彦。それもその筈、暁彦は茉奈に膝枕されていたのだから。

「いけませんっ、そんなに慌てて起きては御身体に障ります。もう少しこのまま横になって……」

「いやっ！あのっ！でもっ！」

「いいですから」

必死に抵抗するも茉奈の押しに負け、元の位置へと戻った暁彦。今日会った女性に膝枕され、恥ずかしくて堪らない。もはや、酒で紅潮しているのか、羞恥で紅潮しているのかわからなかった。

「すみません……本当に……」

「いいんですよ」

「あっ……」

暁彦の頭に手を触れて、優しく撫でる茉奈。心地好い感覚に包まれ

る。

「暁彦様は、不思議な方ですね」

「えっ、そうかな？」

「ええ」

茉奈は肯定して続ける。

「葉月ちゃんがあんなに嬉しそうにしているの、久しぶりに見ました」

「葉月さん？」

何故、葉月の名前が出てきたのだろうか。暁彦には思い当たる節がなかった。

「葉月ちゃんは普段、明るくて頑張り屋さんなのですけれど……時々、無意識に“壁”を作ってしまうんです」

暁彦は茉奈の言葉の意味が、何となくわかった気がする。確かに、葉月は自分が亜人種だと暁彦に気付かれた時に酷く怯えていた。

「特に“人間の方”相手だと異常なまでに臆病になってしまって……」

「うん……」

「亜人種」は「人間」に差別され、迫害され、虐待され続けていた。考えられないような酷い仕打ちを受け、命を落とした者も少なくない。亜人種保護法という法律もほぼ無意味であった。
　人でも動物でもないモノ。それが「亜人種」。人間の都合で勝手に“生み出され”、用済みになれば勝手に“廃棄”する。人間のエゴイズム以外の何物でもない。「知らなかった」「気付かなかった」「関係ない」では済まされないのだ。

「そんな葉月ちゃんがあんなに嬉しそうにしているんですもの、私も嬉しくなってしまって」

自分の事のように喜ぶ茉奈。暁彦では気が付かない些細な変化も、長年付き合っている茉奈だから気付く事が出来る。そんな二人の強い絆を感じる事ができた。
　しかし、暁彦は茉奈の物言いに“違和感”を感じていた。

「葉月ちゃんに笑顔が戻ったのは、暁彦様のお陰です」

「いや、俺は何もしてないしさ……」

「暁彦様は“私達”としっかり向き合ってくれるのですね」

「『私達』って、それってどういう……」

“違和感”は確かなものとなった。何も言わず漆黒の長髪を掻き上げる茉奈。

「なっ！！？」

「……申し訳ありません。隠すつもりは毛頭なかったんです」

暁彦は心底驚く。茉奈の長髪から現れたものは、白と黒の毛で斑模様に覆われた細長い獣耳だった。今まで感じていた“違和感”とは、茉奈は「人間」でなく「亜人種」の視点で話していた事だったのだ。

「（そうか……だから茉奈さんは、あんな言い回しをして……）」

茉奈に先程前の笑顔はもうない。ただ悲しそうに目を伏せ、俯くだけだ。

「ここへ来るまでに会ってきた人間の方々は、私達亜人種の事を全く認めようとはしてくれませんでした。しかし、孝章様とこのＨＯＥの人々だけは違いました。私達を認めて、温かく迎え入れてくれたんです」

「（葉月さんも……）」

《……優し、く……された事……ない、から》

葉月の言葉を思い出す。

「茉奈さん、困っている人がいたらどうする？」

「えっ？……あの」

「いいから答えて」

暁彦があまりに突拍子もない事を言うものだから茉奈は戸惑う。それでも渋々と答えてくれた。

「『困っている方』ですよね？私が手助け出来る事であれば助けようと思います」

「だよね？それと同じだと思うんだ」

「『同じ』……ですか？」

茉奈は不思議そうな顔をする。

「茉奈さんは困っている人が、金持ちだとか貧乏だとか気にする？」

「いいえ」

「でしょ？“理由”なんか要らないんだ。茉奈さんがいて、葉月さんがいて、俺がいる。たったそれだけの事なんだ。人間だとか亜人種だとか、そんなの関係ない！……孝章叔父さん達もきっとそう思ってるよ」

「暁彦様……」

そう言って無邪気に笑った暁彦。茉奈は目を見開いて驚いた。

「……本当に、貴方様は……不思議な、方なんですね……」

すぐにいつもの微笑みを浮かべてくれた彼女。ただいつもと違っていたのは、その目から光る滴を流していた。

◇　◇　◇　◇　◇

「暁彦様、ここが何故『ＨＯＥ』と呼ばれているか御存知ですか？」

「えっと、確か『幸せの施設』だったよね？」

「そうです。ここには私や葉月ちゃんの他に、数十人の亜人種達が生活しています。孝章様は私達のような亜人種達を、世界を回りながら保護する活動をなさっているんです。そして保護された亜人種達はここで生活しているという訳です」

「なるほど、だから『幸せの施設』なんだね」

疑問がひとつ解決した。この「ＨＯＥ」とは亜人種を保護する施設だったのだ。

「それだけじゃありません。この屋敷を名付けてくれたのが孝章様の奥様である美依様なんです」

「美依叔母さんが……？」

【霧ヶ崎美依（きりがさきみより）】

孝章の妻。生まれつき身体が弱かったが、そんなことを感じさせぬほど優しく包容力のある女性。十年前に他界している。

「孝章様と美依様には感謝してもしきれない程です」

「そうだったんだ。俺もここで働くからには、皆の力になりたいな」

「えっ？観光に来られたのではなかったんですか？」

「……うん、俺もここに来てからそういう素振りを全くみせていなかったけど、実は働きに来たんです……」

現実に戻り落ち込む暁彦。彼は無職なのである。ぶっちゃけ、仕事に来た事を忘れそうになっていたのである。

「ふふっ、冗談ですよ。暁彦様にはしっかり働いて頂きますっ」

「お手柔らかにお願いします」

「（貴方様にも感謝しています。今日お話して力になって頂けましたから）」

苦笑いする暁彦に、茉奈はいつものように微笑んでいた。

◇　◇　◇　◇　◇

「ん……」

眩しさを感じて、目元を手で覆う。どうやらカーテンから漏れる陽射しを浴びていたようだ。

「（もう、朝……？うっ……あー、頭痛い……酒抜けてないな）」

横に寝返りをうって二度寝しようとする暁彦。すると顔に何か当たった。

《ぷにっ》

「んむっ……（何だ？）」

顔に当たる、暖かくて柔らかな感触。暁彦はその物体を指先で触れてみた。

《ぷにぷにっ》

「んっ……」

「（柔らかい……何なんだ、これ……？）」

次は手のひら全体で触れてみる。手では覆いきれぬほど、大きく温かで柔らかな物体。

《むにっ、もにもにっ》

「はっ……あっ……」

「（あれ、何か聞こえたような？）」

「あ、暁彦……さま……」

「へっ？」

名前を呼ばれて寝ぼけ眼を開けた暁彦。視界に映ったものを見て凍りついた。

「い、いけませんよ……？昨日、お会いしたばかり、で……まだ、心の準備が……」

茉奈の寝間着の上衣をずらし、黒い下着の上から豊かな胸を鷲掴みする暁彦の手。戸惑う表情の茉奈は顔を紅潮させ、心なしか息を荒げていた。

―ピシッ！

暁彦は石化したように硬直、思考も停止してしまった。

《タタタタタッッ》

足音が聞こえてきたかと思うと、部屋の扉が勢いよく開け放たれた。

「大変ですっ！茉奈さんっ！！暁彦様がどこにもいな……あれ、暁彦様？」

「は、葉月ちゃん……」

「……」

慌てて茉奈の部屋に入ってきた葉月。暁彦がいない事を茉奈に伝えようと思ったが、その暁彦が茉奈の部屋にいることに気付いた。暁彦の首はゼンマイがきれた玩具のように、金切音を発ててこちらを向いた。

葉月の視点からこう見えただろう。茉奈を押し倒し、不埒な行為に及ぼうとする獣の姿が。

「いやぁぁぁあああッッ！！」

葉月は屋敷中に響き渡るような悲鳴を上げる。そして何処から取り出したのか、フライパンを両手で構え、強烈なフルスイングを暁彦の顔面に叩き込んだ。

《パッカァァアンッッ！！！》

「ぶべらっっ！！」

葉月のフライパンフルスイングは暁彦の顔面を直撃、暁彦は部屋の窓を突き破り空彼方の星へとなった。

「はぁっ……はぁっ……」

「あらあら……葉月ちゃんたら、朝からお元気さんね」

その光景を微笑ましく見守る茉奈であった。

「す、すみません……勘違いしてしまって……」

何度も申し訳なさそうに頭を下げる葉月。何とか空彼方から屋敷に帰って来られた暁彦。説得をして誤解を解くことに成功していた。

「らいひょうふ、らいひょうふ……ほっひもわふはっはんはひ（大丈夫、大丈夫……こっちも悪かったんだし）」

顔面を陥没させたまま喋る暁彦、見た目的に大丈夫ではない。葉月のフライパンフルスイングの威力が伺える。

「暁彦様っ」

「茉奈さん」

「孝章様の机にこんなものが……」

茉奈の手には封筒らしきものが握られていた。封筒を受け取る暁彦。表裏を確認すると、孝章から暁彦への手紙らしい。

「手紙ですか？」

「そうみたいだ」

暁彦は封筒から手紙を取り出して読んでみる事にした。

《暁彦へ

屋敷でお前を迎えてやりたがったがすまない、仕事で叶わなくなってしまった。

お前を呼んだのは他でもない。ここで彼女達と共に生活をし、彼女達の傷付いた心を癒してやって欲しい。それはお前にしか出来ない事だ。難しく考える必要はない、暁彦が思った通りやればいいんだ。

それと、暫く私は屋敷を留守にする。その間、私の代わりとして所長代理を頼む。心配するな、トシやカジ、ハルだっている。わからないことがあれば、葉月や茉奈、椿に聞くといい。

唐突に頼んでばかりで申し訳ないな、だが暁彦以外頼めない事なんだ。よろしく頼む。

孝章より》

筆跡は間違いなく孝章のものだった。暁彦は直ぐに手紙を握り潰した。

「（孝章叔父さん、無茶振りしすぎです。絶対無理なので帰らせて頂きます）」

「何て書いてあったんですか？」

「うん、大した事じゃないよ」

隣からひょっこり顔を出した葉月、暁彦は感付かれぬよう平静を装った。

「失礼します」

《ピッ》

「ちょっ、茉奈さん！？」

しかし直ぐに化けの皮が剥がされてしまった。茉奈に手紙を奪われる。茉奈は素早く手紙に目を通し始めた。

「……なるほど、確かに孝章様の筆跡で間違いないですね」

「い、いくらなんでも、いきなり所長代理なんて……叔父さんも冗談きついんだからぁ、ははは……」

ひきつった笑みを浮かべる暁彦。さすがに、昨日今日来た奴がこんな大きな屋敷の所長になるはずがないと強がって見せた。

「孝章様が仰った事ですもの、今日から宜しくお願い致しますね」

「えええーーッッ！！？」

手紙に書いてあった内容があっさりと受け入れられ、暁彦は驚愕した。

「どうしたんですか？」

「孝章様が留守の間、暁彦様が所長代理になって頂けるそうよ」

「そうなんですかっ。では、改めましてよろしくお願いしますね、暁彦様っ」

「ちょっと待ってよ！？いきなり所長なんて、絶対無理だからっっ！！」

茉奈だけでなく葉月にまであっさりと受け入れられた暁彦。必死の抵抗も空しく、主導権は彼女達が握る。

「安心してくださいませ、暁彦様。私達がしっかりとサポートさせて頂きますから」

「わからない事があれば、遠慮なく何でも聞いて下さいね」

「いやっ、あの……」

「「ねっ、御主人様っ♪」」

葉月と茉奈の二人は小悪魔のような笑みを浮かべ、暁彦を困らせるのだった。

## 第3話～素直になれない気持ち？～

「はぁ……何でこんなことになったんだろ……」

所長室の机で項垂れる青年が一人、深刻そうな顔をして頭を抱えていた。それもそのはず、青年は一夜にして使用人を何百人と抱える屋敷の責任者となってしまったのだから。しかも“本人の気持ちは無視して”である。机の上には、大小様々なバインダーやファイルが山のように積み重ねられていた。それらは全て、このＨＯＥ所長の業務内容や資料の書かれたファイルである。暁彦はそのファイルを数冊手に取った所で止まっていた。

「……やめやめっ。駄目だ、こんな迷った気持ちじゃ手につかないや。気分転換しよう」

暁彦は机から立ち上がると所長室を後にした。暁彦が最近始めたこと、それは屋敷内を散歩することだ。前回屋敷に迷って以来（二話？参照）、暁彦は散歩がてら屋敷内を歩き回るようになった。そうして屋敷内の地理を把握しているのだ。といってもこの広い屋敷だ。せいぜい散策した地域は全体の３分の１程度だろう。屋敷完全踏破まではまだ時間がかかりそうだ。

「……あれ？」

ふと、ある部屋の前で立ち止まる。扉からいい香りがする。これは芳香剤の香りだろうか。

「ここってまさか……風呂？」

所長室にはバスルームが設置されており、暁彦はそれを利用していた。しかしこの豪邸だ、大浴場があったとしても何らおかしくはない。そしてなにより、暁彦はその大浴場を目にしてみたかった。

「（これだけの豪邸なんだから、風呂もさぞ立派なんだろうなぁ。ライオンの口からお湯が出てたりして……）」

逸る気持ちを押さえきれず、暁彦は扉を開けた。一層濃くなった香りと独特の湿気、暁彦の予想は当たっていた。ここは間違いなく浴場である。さらに硝子張りの引き戸が現れるが、それも暁彦は躊躇なく開ける。

「豪華風呂ーっ！！」

《ガララッ！》

「……？」

「あ……」

引き戸を開けると目が合った。少女だった。何のことはない、ただ少女と目が合っただけなのだ。思う点があるとすればひとつ、その少女が全裸に近かったということ。

「ッ！！」彼女はショーツに手をかけていた。尾てい骨あたりにはふさふさと毛に覆われた尻尾が生えており、彼女が亜人種だということを証明する。宝石のサファイアのような青い瞳が暁彦を映し出した。

「☆＃¥♀！！？？」

人間とは不思議なもので、あまりにも突発的事態が起きると、脳が対処仕切れず活動が停止してしまうことがある。今、暁彦はまさにその状態であった。彼女は暁彦に気付くと、すぐさまバスタオルで体を覆い隠す。そしてしどろもどろになっている暁彦をキッと睨み付けた。

「……」

「あっ！いや、これは……その……ごめんなさ……」

両手で必死に目を覆い隠し少女の裸体を見ないようにする暁彦なのだが、指の隙間からばっちり覗いていた。手で覆い隠すよりもそこから離れるという選択肢を何故選択しないのか。

「……あれ？」

ハッと我に返ると正面にいたはずの少女が消えている。「そんな馬鹿な、さっきまでそこにいたはずだ」と辺りを見回そうとした瞬間。

「（えっ？）」

天地がひっくり返った。と同時に背中に衝撃が走る。

―ズダンッ！！

「がはっ！！」

気が付くと仰向けに倒れながら天井を仰いでいた。背中の鈍痛を押し殺し辺りを見回すと、暁彦の腕を取る少女が立っていた。どうや

ら少女に投げられたようだ。

「つつっ……」

「……人の裸を覗くとは随分いい趣味をしているな。覚悟は出来ているんだろうな？」

彼女の威圧的な眼と声が暁彦を突き刺す。先ほどの宝石のような綺麗な瞳は欠片も感じられない。

「ご、誤解……です……覗く、つもりじゃ」

背中を叩きつけられたせいか、上手く喋る事が出来ない。信じてもらえるはずもないが、覗くつもりではなかった事だけ弁解しておきたかった。しかし少女は額に青筋を走らせながら、笑顔で一言。

「問答無用」

「ひ、ひぃぃぃ……」

暁彦はこの世の地獄を見たと言う。

◇　◇　◇　◇

「よいしょ……よいしょ……うん？」

洗濯物の入った籠を持って廊下を歩いていると、人だかりを見つけた葉月。何事だろうかと思い、人だかりに加わる。けれど葉月の身長では人だかりの中の様子を見ることが出来ない。見知った顔があったので、その娘に聞いてみる。

「何かあったの？」

「大浴場で女性入浴時間中に覗きが出たんだって」

「の、覗き……？」

今のご時世に“覗き”をする人間なんているのだろうか。今までここＨＯＥで生活してきて“覗き”なんて聞いたことがない。けれど何故だろう、葉月は胸騒ぎがした。

「ちょっとごめんね、通してください」

人だかりをかき分けもみくちゃにされながらも、なんとか中心部へと到達することが出来た。その中心部の光景は葉月を驚愕させる。

「何……これ……？」

葉月は目を疑った。それは異様な光景だった。縄でぐるぐる巻きに縛られた暁彦が正座させられ、一人の少女に怒鳴り散らされている。暁彦は申し訳なさそうにただただ俯くだけだ。それをこの人だかりに晒し者にされているのだから、気が気でないはずだ。すぐさま葉月は暁彦の下へ駆け寄った。

「暁彦様っ、大丈夫ですか！？どうなさったんですか！？」

「は、葉月さぁん……」

暁彦は情けない姿を晒されて半ベソをかいていた。まるで捨てられた子犬のようにプルプルと震えている。

―きゅぅうんんっ！

「（か、かわいいっ……）」

葉月は不謹慎にも母性本能をくすぐられてしまった。抱き締めて優しく頭を撫でる。

「もう、大丈夫ですよ。安心してくださいね」

「ぐすん……」

「……その“ろくでなし”はお前の知り合いか、葉月？」

声をかけてきたのは葉月が十分見知った相手だった。

「椿（つばき）さん！」

「（……つばき？たしか、孝章叔父さんの手紙に書いてあった……この娘がそうか）」

先ほどまで暁彦を怒鳴り散らしていた椿の瞳がふっと緩んだ。状況を飲み込めていない葉月は椿に事情を聞く。

「椿さん、一体何があったんですか？どうして暁彦様が簀巻きにされなくちゃならないんですか？」「こいつはな、葉月。浴場の脱衣所で覗きをしていたんだ！……幸い、犠牲者は……その……私だけで、済んだからよかったものの……」

椿は急にしおらしくなり、顔を紅潮させながらゴニョゴニョと口を紡いだ。先ほどまでの勢いはどこへやら。暁彦は「こんな表情もす

るのか」と感心していると椿と目が合った。

―ぎゅうううう。

「貴様は何をニヤついているんだ……？」

「ひゅみまへん！ひゅみまへん！」

椿に頬を思いきりつねり上げられ悶絶する暁彦。パチンと放されると涙目になっていた。

―コンッ。

「……ぅん？」

後から金属音が聞こえたので振り返ってみる。

「……それ、本当ですか？」

ダークオーラを纏う葉月が獲物（フライパン）を片手に暁彦を見下ろしていた。暁彦は本日二度目の命の危険を感じ取った。

「ひいぃぃっっ！！ごっ、誤解なんですぅーっっ！！フライパン出さないでぇえっっ！！」

何処から取り出したのか、フライパンを構える葉月に暁彦は悲鳴をあげる。前回の一撃がトラウマになっているらしい。葉月はそんな暁彦を見て、フライパンをしまった。

「椿さん、何かの間違いじゃないでしょうか？暁彦様がそんなこと

するなんて……私には考えられないんです」
葉月は暁彦を庇う。そんな葉月に椿は怪訝な表情をした。
「そう言われてもな、この男が覗きをした事は間違いなく事実だ」
「だから、それは誤解……」
「貴様には聞いていないッ！！」
「っ……」
凄い気迫でピシャリと言い切られ、暁彦は全く反論すること出来なかった。大声に葉月も怯みそうになるが耐えた。
「葉月、それでもこの男を信じるのか？」
「……」
葉月の瞳を真っ直ぐ見つめる椿。葉月は黙ってしまった。暁彦はその沈黙に耐えきれなかった。
「（もとはと言えば自分が撒いた種だ。これ以上、葉月さんに迷惑はかけられない）」
暁彦が声を出そうとしたその時。
「……それでも私は暁彦様を信じます。やっぱり、私には暁彦様がそんなことしたなんて考えられません！」

「葉月、さん……」

「……」

椿は目をそらさず、葉月を見つめ続ける。椿の無表情が冷たさを強調する。葉月も必死に負けじと踏ん張る。

「……ふふっ、わかったよ。私の負けだ」

「ふぇっ？」

先ほどまで冷たかった椿の表情が明るくなる。彼女は優しく微笑んだ。

「葉月がそこまで言うんだ、今回は葉月に免じて水に流してやる」

「椿さんっ！ありがとうございますっ！」

「別にお礼を言われることではないんだがな」

笑顔でお礼を言う葉月に、椿は苦笑いした。

「お前達も見世物じゃないんだ、さぁ散った散った」

椿はそう言って野次馬達を追っ払った。三人だけがその場に残る。

「おい、男」

「はいっ」

「勘違いするなよ？今回は目を瞑るが、次このような事があれば、すぐにここから叩き出す。忘れるな」

「は、はぃ……」

椿は暁彦を縛る縄をほどく。しかし葉月に微笑んでいた時が嘘のように、鋭い眼光で暁彦を睨み付けていた。暁彦も素直に頷くことしか出来なかった。椿はそのままその場を後にした。

「はぁ～～……緊張しましたぁ～」

ぺちゃんとその場に座ってしまう葉月。余程疲れたのだろう。

「葉月さん、本当にありがとう。助かったよ」

「いえいえ、これくらい使用人として当然の務めです」

暁彦は葉月に手を差し伸べる。葉月はその手を借りてその場に立った。

「それでも、ありがとう」

「えへへ……何だか照れちゃいますね」

「でも、どうして俺なんか庇ったの？そうすればこんないざこざに巻き込まれることもなかったのに……」

「『どうして』ですか？んー……」

葉月は不思議な顔をして、考える仕草をする。そして笑顔でこう答

えた。

「暁彦様がそんなことするわけないって……本当にそう思ったから。えへへ……すみません、上手く言えないです」

「葉月さん……」

葉月からこの言葉を聞いた時、暁彦は堅く決意する。「この娘達の為に自分が出来ることをしよう」と。

廊下を一人歩く椿。先ほどまでの険しい表情はなく、むしろ嬉しそうな表情をしているように見える。

「（ふふっ、あの引っ込み思案の葉月が、まさか私に反論してくるとはな。あの娘の中で何らかの変化が起きてるということか……）」

葉月の変化を喜ばしく思う椿。彼女のことは少なからず心配していたが、杞憂だったようだ。

「（ただし、あの男はいけすかない……絶対に追い出してやる）」

すぐにまた険しい表情に戻る椿。その切っ掛けをつくったのが、まさかあの覗き犯だとは夢にまで思わない椿だった。

次の日の午前、茉奈の私室にて。茉奈と椿はティータイムを楽しんでいた。実はこの二人はとても仲が良い。こうして二人だけで茶会をする事も少なくない。紅茶を注いだカップと切り分けられたケー

キを椿に手渡す茉奈。

「はい、椿ちゃん」

「すまない、茉奈」

茉奈が自分の分の紅茶を注ぎ終えるまで待つと、椿はカップに手を付けた。

「そういえば、茉奈。“あの男”はどうなっているんだ、お前の担当だろう」

「“あの男”じゃないわ。“暁彦様”よ」

「覗き犯に様付けできるほど私は人が出来ていないからな」

そう言うと一口紅茶を啜る椿。茉奈もやれやれといった顔だ。

「話は聞いたわ。確かに許せないかもしれないけど、暁彦様だって故意に覗こうとしたわけじゃないと思うわ」

「何故、そう言える？」

若干苛立ちを含めた言い方で椿が言う。

「『何故』って……だって暁彦様がそんなことするわけないもの……ほんの少しエッチですけどね」

「お前も“あの男”庇うんだな……」

葉月だけでなく茉奈まで“あの男”を庇う。椿的に面白くない。明らかに不服そうな表情を浮かべる椿。そんな椿を見て茉奈はニコッと微笑んだ。

「椿ちゃん、良い事を思い付いたわ」

「……？」

◆◆◆◆

「……で、何故こうなる？」

「よ、よろしくお願いします……」

午後、何故か所長室で暁彦と二人きりな椿。その真相は。

《椿ちゃんも暁彦様とふれあいたかったのねっ！》

《はっ？》

《そうよね、直接話さないとお互い誤解してる所もあると思うし》

《おい、何を言って……》

《わかったわ！午後からの予定を変えて、椿ちゃんには暁彦様の指導係をお願いするわ》

《ふざけるなっ！誰があんな奴と……うっ！？》

うるうるとした瞳で椿を見つめる茉奈。

《私っ……椿ちゃんと暁彦様が、もっと仲良しさんに……なってくれたらって……》

《お、おい……》

《ごめんなさいっ！いい迷惑よね……私ったら……なんて事を……》

《わかった！わかったから！》

今にも泣き出しそうな茉奈に、アワアワおろおろする椿。椿は茉奈の涙にめっぽう弱かった。

《本当っ！？ありがとう！椿ちゃん！“善は急げ”よねっ！すぐに調整するから！》

《なっ！お前今嘘泣きしてただろ！おいっ！》

と、茉奈が予定を半ば強制的に変更して、暁彦の所長業務教育係として椿を任命したのだ。引き受けてしまった以上、仕方ないと割り切る椿。

「おい」

「はいっ」

「私はお前に干渉する気はない、だからお前も私に干渉するな。それ以外好きにしろ」

「う……はい……」

冷たく突き放す発言に暁彦もしょんぼりしてしまう。昨日の今日では仕方ないことなのだが。

「……」

「……」

沈黙が支配し、聞こえてくるのは時計の針が動く音のみ。その沈黙に耐えかねる者が一人。

「（う、おおお……何だ、この状況は……！？この状況で勉強なんて出来るわけないだろぉ……）」

手にとったファイルで顔を覆い隠し、小刻みに震える暁彦。椿が気にならないわけがなく、ファイルから顔をだしてちらりと覗いてみ

る。

「……」

椿は本棚の本を一冊手に取り、本棚によしかかりながら立ったまま読書をしていた。白い胴着に群青色の袴、背中まで伸びたダークブルーのロングヘア、そして宝石のような青く輝く瞳。頭には尖った対の獣耳、腰にはふさふさの尻尾、とても触り心地が良さそうだ。

「（もう少し愛想よくしてくれたら可愛いのに……）」

「……また、覗きか？」

「（バレてたっ！！）」

本に視線を向けたまま、椿が一言。暁彦は体をビクッとさせて驚いた。

「言ったろう、私に構うな。お前は自分のやるべきことをしろ」

「……」

暁彦は椿の言葉を聞いてとても悲しい気持ちになった。

「せっかく出逢えたのに……それってすごく悲しいことじゃない？」

「……何が言いたい？」

椿は暁彦に目だけを向けた。椿の青い瞳に暁彦が映る。

「俺は椿さんの事知りたいし、椿さんには俺の事知ってもらいたい」

「私に覗き犯の何を知れと言うんだ、覗きの仕方か？」

椿は嘲笑しながら皮肉を言う。

「昨日の事は本当にごめん、わざとじゃないんだ」

「そんな言葉信じられるか。大体初めから気に食わなかったんだ。余所者のクセにいきなりここにやって来て、孝章の代わりだ？何も知らないお前に何が出来る？」

椿は段々と熱くなっていく。暁彦も真剣だからこそ熱くなる。

「……確かに俺は何も知らない……自分に迷いすら覚えてる……」

「そんな奴が所長に……！！」

「だけど！！」

暁彦は椿の言葉を遮った。椿は一瞬呆気に取られる。

「……葉月さんはこんな俺を信じてくれたんだ。会ってまだ間もないこんな俺を！」

《暁彦様がそんなことするわけないって……本当にそう思ったから》

「ひとつだけ決めた事があるんだ。葉月さんの為に……いや、ここにいる人達みんなのために自分が出来ることをしようって……」

「（こいつ……）」

どうしようもなくて、いい加減で、迷ってばかりの暁彦がひとつだけ決意したこと。その決意だけは迷いは微塵も感じられなかった。

「……だから、俺は椿さんにも……」

「お前が言っている事は綺麗事に過ぎない……」

「待っ……」

そう言うと椿は所長室から出て行ってしまった。大量のファイルと暁彦だけが取り残された。

◆　◆　◆　◆　◆

「ふぅ……」

中庭のベンチに座って溜め息を漏らす椿。心なしか、その背中は寂しげである。

「……驚くくらい、真っ直ぐな人だったでしょう？」

「茉奈」

後から声をかけられ振り向くと茉奈が微笑んでいた。

「お前、隠れて聞いてたな？」

「何の事かしら？」

嘘か真か、知らないふりをする茉奈。椿の隣に腰を下ろした。

「あの人は“私達”にも隔てなく接してくれるわ」

「ああ、だろうな。話してみて何と無くわかったよ。……あいつは馬鹿だな」

「ふふ……けれど素敵な人よ」

悪口を言っているにもかかわらず、椿は笑っていた。

「だから、椿ちゃんにも知ってもらいたかったの。外にも私達を認めてくれる人がいる事を」

「それなら初めからそう言ってくれれば良かっただろう」

「あら、私が言ったら椿ちゃんは素直に信じてくれたかしら？」

「うっ、それは……」

痛い所を突かれたなと椿、茉奈はそれを見て微笑む。

「葉月ちゃんもね、暁彦様と出会ってから変わったわ。沢山笑顔を見せてくれるようになったの」

「葉月が変わったのはあいつの影響だったのか……？」

「そうよ、気付かなかった？」

そんなこと考え付きもしなかった椿。なんだか素直に認めたくないというか、悔しい気持ちになる。

「……“風”」

「『風』？」

一言そう呟いた茉奈。オウム返し聞き返す椿。

「暁彦様は“風”ね、このＨＯＥに新しい風を運んでくれる。その風は、葉月ちゃんに……そして私や……椿ちゃんにも……きっと、いい風を運んでくれるわ」

茉奈は少しロマンチストが入っている。しかし今回茉奈が当てはめた描写は、しっくりあてはまっている気がした。

「椿ちゃん……その“風”を……信じてみない？」

「“風”……か」

「ほら、風が吹いてきた」

「……！？」

茉奈が指差す先を向くとそこには見知った人物が立っていた。

「はぁ……はぁ……見つけた……」

「お前……」

そこには肩で息をする暁彦が立っていた。きっと椿を探して走り回ったのだろう。

「……」

「ほら、椿ちゃん」

「ま、茉奈！押すなっ！」

いつまで立っても黙ったままの椿に対して、茉奈はそっと背中を押した。椿は暁彦の前に押し出された。

「な、何をしに来た？お前にはやるべきことが……あったはずだ」

「うん、でも勉強は後でも出来るから……今は椿さんが大事だと思ったんだ」

「（こいつはぬけぬけと、恥ずかしい事ばかり言って……羞恥心がないのか）」

といいつつも椿もほんのり頬を赤くしていた。

「その……さっきは、変な事言ってごめん。でも、絶対嘘じゃないから……信じられないかもしれないけど……」

「あーあー！グダグダ言葉ばかり並べて！！」

いつまでたってもはっきりしない暁彦の態度に椿は声を荒げた。

「私はな！口先ばかりの奴が大嫌いなんだ！男なら黙って態度で現せ！」

暁彦に向かってずんずん歩いていく椿。その迫力に押され暁彦は後退りそうになる。暁彦の目の前に来ると椿は立ち止まった。

「……それで、お前の気持ちが伝わったその時は……」

急にしおらしくなる椿。後ろを向いて腕を組んだ。そして小声でつぶやくように言った。

「お前の事、認めてやる……」

「椿さん……」

「かっ、勘違いするなよ……少しでも期待を裏切るような真似をしたら……いやっ！別にお前に期待しているとか、そういうのでは……！！」

どんどんしどろもどろになっていく椿。頬を赤くしてぶんぶん手を振る。

「とにかくっ！少しでも私達を裏切るような真似をしたら、すぐに

ここから叩き出してやる！肝に命じておけ！」

「はいっ！」

「（結局、それって”期待してる”って事よね。……本当は認めているくせに……素直じゃないんだから）」

椿の照れ隠しの表情と、暁彦の嬉しそうな顔、それを見守って微笑む茉奈の顔。

「ほら、さっさと持ち場に戻れ。少しでも早く仕事を覚えろ」

「えっ、今から？」

「当たり前だ、仕事できない奴はいらないからな」

「ふふっ、すっかり仲良しさんですね」

そのあと暁彦は所長室で椿にみっちりしごかれたそうな。

《カポーーン……》

その日の夜、大浴場にて。

「椿さん、暁彦様と仲直り出来たんですね！？」

「私がいつ、あいつと喧嘩した？」

「恥ずかしくて照れていただけよね？」

「誰がだっ！！」

大浴場の大理石に囲まれた広い湯船に浸かり、葉月、椿、茉奈の三人は疲れを癒していた。周囲には他にも女性の使用人が入浴していた。もちろん、現在は女性入浴時間である。

「暁彦様って不思議な方ですよね。会って間もないはずなのに……親しみやすいというか、昔から知っているような」

「それが暁彦様の魅力なのね、きっと。私はとても優しくて誠実な方だと思うわ」

「あっ、私もそう思います！」

「葉月も茉奈も買い被り過ぎだ。あいつはそんな男か？」

暁彦のことで、きゃっきゃっと喜ぶ二人に釘を刺した椿。

「あら、椿ちゃんだって暁彦様の真剣な姿を見た時、満更でもなかったんじゃない？」

「そんなわけ……」

椿は昼間の暁彦の言葉を思い出す。

《ここにいる人達みんなのために自分が出来ることをしようって……》

―キラキラ……。

椿の思い浮かべた記憶は何故か美化されていた。暁彦のバックには星がキラキラと輝いている。しかしながら、当の本人は美化していることにまったく気が付いていなかったりする。

「ッ！？」

一瞬にして顔が紅潮する椿。素早く湯船に沈み込んだ。

《ザブンッ！》

「ブクブク……」

「つ、椿さんっ！？」

何があったのか理解出来ない葉月は、椿の行動を見て焦る。茉奈はそれを見て微笑む。

「ふふふっ、あらあら」

《ザバッ！》

「きゃっ」

沈んだ椿は浮上し立ち上がる。もはや顔が赤いのは湯のせいなのか、それともその他の要因なのか、わからない。椿は拳を握り、わなわな震え始めた。そして叫んだ。

「……認めない……絶対、認めなーいッ！！」

「へーっくしっ！！」

所長室の浴室で入浴している暁彦。大きなくしゃみが浴室にこだまする。

「あの大浴場、いつか入ってみたいなー」

大浴場で噂されているとも知らず、マイペースな暁彦だった。

## 第４話～笑顔～

「ハァッ……ハァッ……！！」

闇夜の林をあてもなく走り続ける。心拍数は跳ね上がり、汗はすでに流し尽くし、喉が枯れ果ててもなお走り続けなければならない。そうしなければ奴等に“狩られて”しまう。

「ッ！！」

「いたぞ！！」

正面に現れた武装した男。手には、引金を引けば高速の鉛玉を何発も発射させる鉄の塊……そう、ライフルだ。

「化け物が！！」

男は銃口を向けた。恐れて逃げ回るだけではいずれ“狩られる”、形振りなど構っていられなかった。立ち止まるどころか、男に向かってさらに加速する。“それ”に向かって男は引金を引いた。

―パァンッッ！！

破裂音とともに銃口が火を吹いた。

「……な、に……？」

男は“それ”に銃口を向けていたはずだった。しかし引金を引いた時、銃口は真上を向いていた。“それ”の手が銃口の先端部を掴み、

軌道をずらしていたのだ。

「ウゥウウアアアッッ！！」

―ズドッッ！！

「〜〜っっ！！」

男の腹部に渾身の一撃が突き刺さった。男は声にならない悲鳴をあげ、前屈みになる。

「ァァァアアアッッ！！」

―グシャッッ！！

さらに両手で男の頭を掴み、地面を強く蹴って加速させた膝を顔面に叩き込んだ。小気味良い骨の破砕音と共に、男は後方に吹っ飛んだ。何度か地面を跳ねると男は動かなくなった。

「ハァッ……ハァッ……」

男の体から吹き出した鮮血を浴びた“それ”は、雲の隙間から漏れる月明かりを浴びて、妖艶な美しさを放っていた。“それ”は年端もいかぬ少女だったのだ。

「銃声が聞こえたぞ、こっちだ！！」

「！！」

気配を感じるとまたすぐに駆け出した。立ち止まることなく闇に溶

けるように、少女は消えていった。

◇　◇　◇　◇　◇

「これが納品伝票」

―バサリッ！

「これが発注伝票」

―バサリッ！

段々と積み重なっていく伝票の束。みるみるうちに机がその束に覆われていく。これだけの屋敷を切り盛りする伝票だ、その量も半端ではない。

「目を通して個数等異状無ければ、確認印を押せ」

「椿さん、押せって……これ全部……？」

所長室にて、椿に仕事を見てもらっている暁彦。暁彦は机の上にある大量の伝票に目を向けていた。

「一枚だけでいいわけないだろう、全部だ」

「ひ～～っっ」

椿教官の厳しい教えで、今では従業員顔負けの仕事量をこなすよう

になった暁彦。いや、そうせざるを得なかったと言うのが本音だが。

「ふむ、少しはマシになったようだ」

「あ、ありがとうございます……」

「休憩しよう」

「やった」

教官の厳しい点検にも合格をもらい、休憩という名のご褒美を頂けた。程なくして、カート押してきた使用人が所長室に入ってきた。葉月と同い年くらいの女の子、緊張しているのかたどたどしい。

「失礼します……」

「すまないな、後は私がするから戻っていいぞ」

「えっ、ですけど……」

カートを受け取ると椿が少女に言った。茶器の用意という少女の勤めを、椿が肩代わりするというので戸惑っているのだろう、困った顔をしている。

「まだ、することがあるんだろう？後は私にまかせて仕事にお戻り」

「はぅっ！？」

少女の耳元で椿が囁くように言うものだから、少女は顔を真っ赤にして照れていた。同性から見ても椿は十分魅力的なのだろう。椿自

身は自分の行いが、少女をときめかせている事に気付いてなさそうだが。

「はい……椿ひゃん……」

「ああ」

椿の微笑みで、メロメロになった少女はフラフラしながら幸せそうに所長室を出ていった。その一部始終見ていた暁彦が口を開いた。

「……椿さんてさ、女の子からラブレターとかもらったことあるでしょ？」

「ッ！？」

―ガチャン！

暁彦の言葉にひどく動揺する椿、ソーサーを落とした。頭の獣耳をバフッと立てて頬を赤くする。

「なっ、何を言ってるんだ、お前はッ！！そそっ、そんなわけあるかッ！！」

「あ～、はいはい……（こりゃ、図星だな……）」

暁彦は椿の態度の分かりやすさに苦笑いした。暁彦の一言にすっかり拗ねてしまった椿だったが、茶器の用意をしてくれる。

「ほら」

「ありがとう」

椿からコーヒーの入ったカップとソーサーを受け取る。暁彦はふと思ったことを口にした。

「椿さんは、さっきの娘や、葉月さんや茉奈さんが着ているような……メイド服って言うの……？着ないの？」

「私が？」

確かに椿は、女性が着ているような作業服ではなく、白い胴着に群青の袴という古風な格好をしている。しかも、その格好で使用人のように茶器を用意する姿は、ミスマッチしていて面白い。茶道に通じているのではないかと思った。

「何だ、私にあの格好をしてほしいのか？」

「いや、そういうわけじゃないけど……」

ニヤリとする椿、からかうように暁彦を見つめた。

「私には、あんなスカートだの、ブーツなど着こなせないさ」

「どうして？似合うと思うけど？」

「い……いいんだ、私には似合わない……身長も高いし（またこいつは、さらりと恥ずかしいことを……）」

暁彦に悟られないように照れ隠しする椿。椿の身長は１７０？くらいで女性にしては高い方だが、暁彦は彼女に着こなせない事はない

と思った。

「それに私はこっちの方がしっくりくる」

「うん、その姿も似合ってる」

「〜〜〜っ！（こいつはっ……）」

にぱっと笑う暁彦に、声を出さないように悶絶する椿。それも暁彦に気付かれないように背中を向けた。

「茉奈さんに聞いたんだけど、椿さん弓道やってるんだって？今度見に行ってもいい？」

「駄目だ！来るな！」

「え〜、なんで？」

「うるさい！」

「なんか、怒ってない……？」

「怒ってないッ！」

いつの間にか、椿とも普通に会話できるようになった暁彦。初めは冷たかった彼女も、段々と暁彦を受け入れ始めた。暁彦もそれが嬉しくてたまらなかった。

◇　◇　◇　◇　◇

「椿さん、なんで怒ってたんだろ。怒らせる事言った覚えはないんだけどな」

暁彦もまた椿が照れてしまう発言をしていた事に気付いていなかった。

「おっ、今日はすごくいい天気じゃん！外出たら気持ち良さそう」

廊下の窓から見える外の景色はとても生き生きして見えた。景色をみて風を浴びたくなった暁彦は外へと飛び出す。屋敷の周りは森林帯に囲まれており、裏側には小高い丘が広がっていた。使用人達にとっても散歩や運動をしたり、憩の場となっている。

「はぁ……はぁ……くそ、最近デスクワークばかりだったから、体が鈍ってる……」

肩で息をしながら何とか丘へとたどり着いた。そのままごろんと地面に大の字で寝転んだ。

「ふぁ～～～っ！気持ちいい……」

真上に広がる真っ青な空と、体をなでる爽やかなそよ風。聞こえてくるのは、そよ風に吹かれてはしゃぐ草木の声と、小鳥達の歌声。体いっぱいに感じて、仰向けに寝転んだまま背伸びした。体が十分にリラックスして、睡魔が現れそうになった頃。

《……お、じぃ……ちゃん……》

「……ぅん？……あれ？」

今、一瞬何かが聞こえたような気がした。気のせいだと思い、また寝転がる。

《……おじいちゃん！！》

「！！」

今度ははっきりと聞こえた。少女の声だった。その声は不思議で、直接耳に聞こえてきたというよりかは、頭の中に響いてきたという感じがした。起き上がってキョロキョロと辺りを見回すが、特に変わった様子はない。やはり気のせいだったのかと思い始めた時、丘と林の境界に何かを見つけた。遠くから見ると、それはぼろ布のようなものだったが、近付くにつれて次第に輪郭がはっきりとしてくる。

「……えっ……人だっ！！」

直ぐ様、駆け寄る暁彦。うつ伏せに倒れてる人を抱き起こした。

「大丈夫ですかっ！？」

「う……ぁ……」

ぼろぼろの衣服を身に付け、至るところ擦り傷切傷、血の滲み、泥まみれで、死んでいるのではないかと思うほどだった。かろうじて息をしているもののそれも弱々しく、衰弱しきった体は力なくだらんとしていた。

「この娘……」

さらに驚く事に、それは年端もいかぬ亜人種の少女だった。燃えるような真っ赤な髪からは黄色と黒の縞模様の獣耳が覗いている。

「とりあえず屋敷に運ぼうっ！」

暁彦は少女を背中に背負うと、今登った丘を下っていった。

「暁彦様っ！午後のお仕事すっぽかして、どこ行ってたんですかっ！？椿さんカンカンですよっ！」

屋敷に着くやいなや、出会った葉月に怒られてしまった。

「葉月さん、それどころじゃないんだっ！今すぐ、この娘手当てしないとっ！」

「えっ……酷い怪我っ！！わかりました、医務室はこっちですっ！！」

怒っていた葉月も暁彦の真剣な表情と背中の少女を見てただ事ではないと判断したようだ。暁彦に医務室までの道のりを案内した。

「センセっ！八雲（やくも）センセっ！」

慌ただしく医務室の扉を開ける葉月、続いて暁彦も部屋に入ってき

た。

「やぁ、葉月君。それに暁彦君だったかな。どうしたんです？」

医務室には白衣に身を包み、フレームレスメガネをかけた優男が茶を啜っていた。血相を変える暁彦や葉月に全く動じず、穏和な表情を浮かべている。

【僉山八雲（みなやまやくも）】

ＨＯＥ専属の医者。穏和な性格の優男だが、人間だけに関わらず亜人種医療においても精通している切れ者。

「せ、センセっ！！た、大変なんですっ！！」

「まぁまぁ、落ち着いて。ほら、お茶でも飲みなさい」

「お茶なんて飲んでる場合じゃありませんっ！」

自分の湯飲みを葉月に渡そうとする八雲。葉月はブンブンと首を振って断る。

「先生っ！この娘が大変なんだっ！」

「おや、その娘は……？」

「屋敷裏の丘で倒れていたんだっ！身体中怪我だらけで、ぐったりしてて……！！」

「わかりました、そこのベッドに寝かせてください」

暁彦が少女をベッドに寝かせると、先程のゆったりしたペースが嘘のように、八雲は素早く行動した。八雲は少女が身に付けるぼろぼろの衣服を脱がせていく。

「葉月君、消毒ガーゼで身体を拭いて」

「はいっ」

「暁彦君は洗面器にお湯を、それとタオルも準備してください」

「はい！」

暁彦と葉月にてきぱき指示を出しながら、八雲は少女の身体に直接触れて怪我の状況を把握していく。一通り把握し終えるとすぐに怪我の手当てに取りかかった。

八雲の手が止まったのはそれから数時間後のことだった。葉月と暁彦は少女の手当てで、くたくたに疲れて椅子に座り込む。八雲はずっと少女に付きっきりで手当てしていたにも関わらず、疲れた様子もなく穏和な表情を浮かべていた。

「お疲れ様でした、二人とも」

八雲は葉月と暁彦にココアの入ったカップを渡す。暁彦は恐る恐る聞いてみる。

「先生、あの娘の容態は……？」

「もう、大丈夫ですよ。見た目の割りに酷い怪我もないので、安静にしていれば直ぐに良くなります」

ベッドには、身体を手当てされた少女が点滴されながら眠っていた。身体も衣服も清潔になり、苦しそうだった呼吸も今では落ち着いている。

「良かった……」

「先生、ありがとうございます」

笑顔でそう言った八雲の言葉を聞いて暁彦と葉月は安堵した。葉月は目に涙まで溜めて喜んだ。

「いいんですよ、私はこれが仕事ですから。この娘を助けることが出来たのは葉月君に暁彦君のおかげです、こちらこそありがとう」

八雲は笑顔で答える。彼もまた、心から喜んでいるようだった。不意に八雲が言った。

「おや、これは困りましたねぇ……御茶葉が切れてしまいました。葉月君、申し訳ないのですがハルさんに言って御茶葉を貰ってきてくれませんか？」

「はい、まかせてください」

ひとつ返事で了承し葉月は医務室から出ていった。それを見計らった八雲が暁彦に話す。

「時に、暁彦君。君はこの娘が『丘に倒れていた』と言っていましたね？」

「は、はい」

急に雰囲気が変わる八雲、彼の表情から笑顔が消えた。暁彦もそれに気が付いた。

「心して聞いてください。彼女には“銃創”がありました」

「それって……銃で撃たれたって事？」

一瞬にして顔がひきつる暁彦。

「はい。これは私の推測なのですが、あの娘は“ハンター”に襲われたのだと思います」

「！！」

【ハンター】

文字通り“狩る者”の意。未だ根強く残る亜人種差別が生んだ悲劇、亜人種を殲滅するための組織。今ではもちろん、亜人種保護法によ

り解体させられたが、未だに非合法に活動しているものがある。

「君はここに来てまだ間もないですが、現在このＨＯＥの責任者は君です。私たちもずっと前から亜人種差別を無くそう努力していますが……その中でも一番の問題がこの“ハンター”という組織です」

衝撃的な事実に目眩がする。保護法が制定された今でさえもこんな暗黒が蠢いていたとは。

「ハンターはこの娘達の事を“人”だと思っていません。金さえ出せば何でもするし、また“狩る”事を楽しんでいる奴等さえいます」

「そ、んな……みんな同じ……生きているのに……」

「辛い事実ですが、受け止めなくてはなりません。そして今すぐでも止めさせなくては……」

八雲の悲しそうな瞳、彼は本当に努力してきた。しかし未だになくならない亜人種差別、そしてその悲劇。今の段階ではどうすることも出来ない自分の不甲斐なさを許すことができなかった。

「君も、このＨＯＥに携わる以上他人事ではありません。だから、ぜひ君にも聞いておいてほしかった」

「……」

暁彦は何も言うことができなかった。どうすることも出来なかった。

ただ、この胸の蟠りを抑える事しか出来なかった。

◆　◆　◆　◆　◆

夕食を終えた後、暁彦は医務室に来ていた。夕食時にたまたま椿と出会し、顔面にアイアンクローを食らって頭蓋骨を軋ませられたが、事情を話すと許してくれた。アイアンクローを放たれる前に事情を話しておきたかった。

「暁彦君、私が看ているよ。もう、休みなさい」

「はい、お願いします」

八雲は暁彦に気を使ってくれた。暁彦もベッドに安らかな寝息をたてる少女を見て安心した。医務室を後にしようと思ったその時、ふと少女が身に付けていたぼろぼろの衣服が目に止まる。内ポケットに何か入っている。不謹慎だと思ったが、中身を見せてもらうことにした。

「……写真？」

それはクシャクシャになった写真だった。所々、濡れたり泥がついたり汚れていたが、大事そうに内ポケットにしまわれていた。写真には二人の姿が写し出されている。

「どうしたんです？」

「この娘の服のポケットに写真が」

一人はこの娘、今より幼い少女の満面の笑顔。もう一人はその少女

を肩車する老人の姿、その老人もまた少女を肩車して幸せそうに微笑んでいるのだ。暁彦は胸に何かが込み上げてくるものを感じていた。

「きっと……家族の……写真ですね」

「ええ、そのようです」

暁彦は八雲と顔を合わせて微笑んだ。その時。

「……ぅ」

「！」

少女が声を漏らす、うなされているようだった。

「……だめ、お……じぃ、ちゃん……逃、げて……」

さっきまで安らかな表情を浮かべていた少女の顔が苦痛に歪む。

「おじぃ、ちゃん……やだっ……あた、し……ひとり……しな、いで……」

少女の切なく悲しい声が医務室に響く。そして。

「おじいちゃんッッ！！」

―ガバッ！！

少女は目覚めた。ベッドから上半身を起こしすぐに辺りを見回す。

「……ここ、は……？」

ゆっくりと辺りを見回し、脇にいた暁彦に目が合った。暁彦は少女に話しかける。

「良かった、目が覚めたんだね。大丈夫、どこも痛くない？」

「待て、暁彦君。様子がおかしい……！」

少女は暁彦から目を離さなかった。赤い瞳が暁彦を見つめ続ける。その瞳は輝きがなく、冷たさを感じさせる。不意に少女は笑った。

「人間……見つけたっ……」

―ゾクッッ！！

「うっ！！」

背筋が凍りつくような寒気がした。こんな顔を見たのは生まれて初めてだった。瞳孔は小さく収縮し、血のような赤い瞳が暁彦を貫く。口の両端は裂けるように上に持ち上がり鋭い牙が現れた。それは狂った笑みだった、感じたことのない恐怖が暁彦を凍り付かせる。

「おじいちゃんを殺した……人間……おじいちゃん、私が仇を……取ってあげるからね……」

「（やばいやばいやばいやばい……！！）」

本能が告げていた、“逃げろ”と。

少女は一度跳躍してベッドにしゃがみこむと、深く沈み込み暁彦に向かって二度目の跳躍をした。その素早い動きに暁彦は対応出来ない。

―ガシャァァアアッッ！！

轟音とともに暁彦の真後ろにあった鉄製ロッカーがひしゃげた。

「はぁっ……はぁっ……」

「八雲……先生……」

間一髪、八雲が暁彦の襟首を掴んで引っ張り、少女の一撃をかわすことができた。あの華奢な身体にこれほどの力があるのかと信じられなかった。

「殺す……殺してあげる……ひゃはっ」

少女は腕に繋がっている点滴をブチブチと引き抜く。点滴針を引き抜いた腕から血が滲む。

「暁彦君、立てるかい……？」

「はっ、はいっ……」

「彼女は錯乱しています……多分襲われた時のショックでしょう。このままじゃ危険です。他の人に被害が出ない所へ逃げましょう」

「わかり、ました……」

少女から目を離さぬように、慎重に扉へと向かう暁彦と八雲。少女もこちらに顔を向けたまま不気味に微笑んだ。

「（私が合図したら走りなさい、いいね？）」

頷いた暁彦を確認すると、八雲は傍らにおいてあった冷却スプレーを少女に気付かれぬよう背中に隠し持った。そして少女が跳躍するため屈んだ瞬間を見計らって、冷却スプレーを投げつけた。

―ヒュカッ！

少女に投げつけられたスプレー缶は真っ二つに寸断される、いや……少女が寸断したのだろう。もちろん、缶内に充満したガスは外壁を失う事で外へと噴出される。噴出されたガスは霧状となり、部屋内に発散した。

「今だっ！」

八雲の声を合図に暁彦は駆け出した。医務室の扉を出て廊下を駆け抜ける。

「ここからだと裏口を通って外へ……そうですよね、八雲せ……っ！？」

ここまで来て気付いた。一緒に駆け出して来たはずの八雲の姿が見えない。後ろを振り返ると、医務室から霧状のガスが　漏れていた。

「そんなっ……あっ！！」

霧状のガス内に影が見える。それはゆらゆら揺れながらこちらに近付いてくる。暁彦は安堵した。その影が八雲だと思ったのだ。

「良かった……先生……ッ！！？」

―ズルッ……ズルッ……。

「……みーつけたっ」

そこに現れたのはあの少女だった。右手には八雲が引き摺られている。暁彦を見て、宝物を見つけたかのように嬉しそうに笑った。

「（どうする……どうする……どうすれば……）」

必死にこの状況の打開策を練る暁彦。このような危機的状況を体験したのは初めてで、今までにないほど頭は回転する。しかし、いい案など思い浮かびそうになかった。

「キャァァアアッッ！！」

悲鳴が辺りに響き渡る。その悲鳴を上げたのは、さきほど医務室を出て行った葉月だった。

「葉月……さ……」

「……？」

最悪のタイミングだった。このままでは葉月まで少女に襲われるかもしれない。それだけは避けなくては。

「来るな！来ちゃ駄目だ！！」

「で、でもっ……！！」

「早く逃げ……」

―ズドッ！！

暁彦の体に衝撃が伝わる。腹部に強烈な痛みが走り足が地から浮いた。少女の右拳が暁彦の腹部に突き刺さったのだ。

「ごほッッ！！」

あれほど離れていた距離が、いつの間にか縮まっていた。暁彦は殴り飛ばされた勢いで、廊下を跳ね転がった。

「暁彦様ァッ！！」

すぐに葉月は暁彦のもとへ駆け寄った。

「ぅ……ぐぅ……葉、月……逃げ……ろ……」

「暁彦様をおいていけませんっ！」

何とか立ち上がろうとするが、腹部に突き刺さった衝撃は内蔵まで達しており、体の自由を奪う。

「なんで……？」

「ひっ……」

いつの間にか、少女は暁彦の正面に立っていた。暁彦を殴り飛ばし開いた距離も数秒間で縮まる。少女の動きはありえない速さだった。葉月は少女と暁彦の間に割って入る。

「……暁彦様に……乱暴しないでっ！！」

「葉、月……」

葉月は両手を広げて暁彦を守ろうとする。小刻みに震えているのは、恐怖を圧し殺しているからだろう。そんな葉月を少女は不思議そうに見つめた。

「ねぇ……なんで、人間を庇うの？」

「えっ……」

「人間は……亜人種の敵……おじいちゃんを殺した……仇……憎くないの……人間が……？」

少女は人間を酷く憎んでいる。葉月もまた、このＨＯＥに来るまで心ない人間に冷たくされただろう。憎んでいても可笑しくはなかった。

「……私……私は……」

葉月は少女の質問に戸惑っているようだった。暁彦がいる手前、本心を語る事を躊躇っていたのかもしれない。葉月は呟くように口を開いた。

「……確かに、憎んだこともあったよ……。嫌われて、気持ち悪がられて……痛くて辛くて、たまらなかった……」

「じゃあアンタも憎いはずでしょッ！？それがどうして人間なんかとっ……」

「だって……今は、一緒に笑ってくれる人がいるから……」

「！」

不意に葉月は笑った。

「ここの人はみんな私達と普通に接してくれる……叱ってくれる、笑ってくれる……私達のこと“認めて”くれるっ！！」

「……そうだ」

震える膝をだましながら、暁彦は自力で立ち上がる。腹部に手を当てているのはダメージが残っているからだろう。正面に立っていた葉月を脇に寄せた。

「はぁっ……君にも、そんな人が……いたはずだ」

「……お、じい、ちゃん……」

少女はぽつりと呟いた。少女の発する圧力が和らいだと思った瞬間。

「……気休めを言うなァァッッ！！」

―ガッッ！！

「がはっ！！」

少女は叫ぶと、暁彦の喉を右手で掴み宙に持ち上げた。暁彦の足が床から浮いた。

「その人を奪ったのは誰だッ！？そうっ、お前達人間だよッッ！！おじいちゃんは私を逃がすためにお前達人間と闘って……殺されたんだッッ！！」

「ぐっ……がっ……！！」

「いやぁぁああっっ！！」

葉月は悲鳴を上げる。掴まれた右手を振りほどこうにも、もの凄い握力で振りほどく事が出来ない。血液、呼吸が塞き止められ苦痛に顔が歪む。

「（そうか……だからこの娘はこんなにも俺達人間を憎んで……最愛の人を人間に奪われたから……）」

薄れていく意識の中で、暁彦は少女の事を考えていた。少女の痛みや辛さを生んだ責任を甘んじて受けようというのか。暁彦は反撃する力も失くなり、両腕をだらんとさせた。

「ははっ……このまま絞め殺して……っ？」

「やめてッ！放してよッ！暁彦様が死んじゃうッ！」

「（葉月、さん……）」

葉月は必死に少女の右手を掴んで揺さぶる。何とかして暁彦を助けようと少女に掴みかかるがびくともしない。

「放してッ！放してったらァッ！！」

「煩い！」

―パンッ！

「あうッッ！！」

少女の平手打ちが葉月の頬を打つ、その勢いで床へと転がった。

「人間に飼われやがって……邪魔するならお前も……」

―ひらり。

その時、暁彦のポケットから何かが落ちた。それはゆらゆらと宙を舞うと、ゆっくりと床へと落ちる。

「―ッ！！」

少女はそれを見て唖然とした。それは写真だった。少女と老人が仲睦まじく、笑顔で写った写真。

「……おじぃちゃん」

一筋の雫が少女の頬伝った。少女は脱力しその場に座り込む。同時に暁彦は解放され、床へと倒れ込んだ。

「がはッ……げほッ、ごほッ！！」

塞き止められていた血液と呼吸が再び循環し暁彦は噎せ込む。次第に意識が回復すると、視界に葉月の姿が映った。

「葉月、さんッ」

直ぐに駆け寄って、床にうずくまる葉月を抱き抱える。頬を赤くしてはいたが、幸い大した怪我ではないようだ。

「暁彦様……良かった、無事だったんですね……？」

「ああ、葉月さんこそ大丈夫？」

「はい、大丈夫です……あの娘は……？」

すぐに少女の事を気にかける葉月。打たれてもなお相手のことを気にする辺り葉月らしい。暁彦も同じ気持ちだった。

「……っ……っ」

少女は張りつめた糸がぷっつりと切れたように呆然していた。あの写真を大切そうに胸に抱えながら。

「葉月さん、ごめん」

「暁彦様……」

葉月の上半身を起こすと、暁彦は少女に向き直った。

「……会ったこともない俺が言える事じゃないけど」

「……？」

少女は虚ろな瞳でゆっくりと暁彦を見た。その姿はあまりにも弱々しくて、暴れていたのが嘘のよう。少女の瞳にもう敵意はなく、悲しい眼差しを浮かべるだけだった。

「君を守るために闘ったお祖父さんは……君に『生きて欲しい』と願ったお祖父さんは……！！……君が復讐することなんて望んでないッッ！！」

「……っ」

少女の瞳が一層開かれる。

「ただ“生きて”……ただ“笑って”欲しかったんだッッ！！」

「―ッ！！」

少女の瞳から止めどなく溢れる涙、やがてその雫は頬を伝い写真へと落ちる。落ちた雫は写真へと染み込んだ。

「アアッッ！！ウァアアアアアッッ！！」

少女は叫び声を上げて泣いた。子供のように泣きじゃくる少女の姿。暁彦は少女に歩み寄った。

「……今までよく頑張ったね、もう安心していいから、大丈夫だから」

「ァァァァァッッ！！」

少女の頭を優しく撫でて身体を抱き締める。少女は抵抗することなくただ泣き続ける。冷えた細く華奢な身体が痛々しかった。

◆◆◆◆◆

「呼び出しておいて、いないとはどういうことだ」

「まぁまぁ、椿ちゃん」

「きっと、すぐに来られますよ」

後日、所長室に集められた葉月、茉奈、椿の三人。程なくすると所長室の扉が開いた。

「やぁ、みんな。待たせてごめんね」

「全くだ」

待たせて現れた暁彦に不満を漏らす椿。

「それよりも、今日は改まってどうなされたのですか？」

「うん、今日はみんなに紹介したい娘がいてね……入って」

暁彦がそう言うと所長室の扉が開いた。

「わぁ……」

「……」

そこへ現れたのはあの少女だった。少女は葉月達と同じ作業服に身を包んでおり、よく似合っていた。

「良かった、元気になったんだね！」

「可愛いです、よく似合っていますよ」

「あ、その……ありがと……」

少女は緊張しているのか、照れているのか、無愛想に話す。少女は先日事件を起こしたが、幸いにも暁彦、葉月、八雲の怪我は大したことなく大事には至らなかった。少女の身体と精神の状態も回復し、今では大分安定している。

「さ、自己紹介して」

「……か、華恵（かえ）……です、よろしく……」

何とか捻り出した言葉、今の華恵の精一杯だった。

「華恵ちゃん！私、葉月っ。よろしくね！」

「わ、わっ……」

葉月は嬉しそうに華恵と握手するとぶんぶん手を振った。

―きゅうっ。

「わぷっ！」

「本当に可愛い娘……私は茉奈、よろしくお願いしますね？」

初対面の茉奈に抱き締められて、華恵は戸惑っているようだった。

「ちょ、放してっ」

「あら、ごめんなさい」

「私は椿だ、よろしく頼む」

「……よ、よろしく」

一通り紹介し終えると暁彦が口を開く。

「今日から華恵にはこのＨＯＥで生活してもらうことにした。最初の内は不慣れな所もあると思うけど、みんなで助けてあげて欲しい」

暁彦の言葉に葉月、茉奈、椿の三人は頷く。

「じゃあ、さっそく……」

「待って！」

暁彦が言いかけた時、華恵が口を開く。和やかな雰囲気が一転、華恵の真剣な表情に緊張が走る。

「その前に、言わせて欲しいことがあるの……」
華恵は伏せ目がちに、申し訳なさそうに言った。皆、華恵を注目する。一呼吸おいて華恵が話す。
「ごめんなさいッッ！！」
「えっ……？」
華恵の言葉に皆、不思議そうな顔をする。
「あたし……みんなを傷付けた……。こんなに優しく迎え入れてくれるみんなに、ひどいことした……」
華恵はポロポロと涙を溢してしまう。華恵なりのけじめの付け方なのだろう。
「ずっと、謝り、たくて……ごめっ、なさい……っく」
「……華恵」
暁彦は華恵にそっと近付く。
「笑えっ」
―むにぃ。
「ひゃっ！？」

暁彦は突然、華恵の両頬を指でつまむと左右に引っ張った。華恵は予期せぬ事態に慌てる。

「なっ、なにひゅるのッ！」

「華恵は一番笑顔が似合う、だからどんな時も笑っていてほしい」

暁彦の言葉に華恵は呆然した。

「お前は確かに皆を傷付けた……でも、今しっかりと謝ったじゃないか。それで帳消しだ」

「そうそうっ！私なんて全然平気だよっ！」

「してしまったことは仕方がないわ。だからこれからに繋げましょう。華恵ちゃんはこれからその分挽回すればいいわ」

「みんな……」

皆、華恵を励ましてくれる。華恵の思いはすでに皆に伝わっていたのだ。

「なっ？……みんな華恵のこと許してくれるってさ。だから、華恵……“笑って”くれ」

「……」

その時、どんな表情をしていたのかわからなかった。ただ、皆の笑顔につられて笑った。きっと、上手く表情を作れていなかったけど、精一杯いい笑顔を作った。

「みんな、ありがとう……」

そこには、満面の笑みを浮かべる少女の姿があった。

◆◆◆◆◆

華恵の部屋には今でも、写真たてに飾られた一枚の写真がある。その写真はぼろぼろで所々色褪せたり、汚れてしまっているが、華恵にとってはかけがえのない大切な写真だ。祖父と、娘と、笑顔で写る“家族の写真”が飾られている。

## 第5話〜二人の仔猫とその母親〜

毎日、朝はやって来る。今朝もきっと、気持ちのいい朝が来るはずだった。

「くかー……」

ＨＯＥの起床時間は朝６時、主人は毎朝６時に目覚ましをセットしている。

《ジリリリリリッ！！》

セットした時間になって独特の金槌音を鳴らす時計。ベッドの脇にあるキャビネットから主人を起こすため、勤めを果たそうと一生懸命に音を鳴らすのだが。

「んー……」

ふかふかとした羽毛布団から、にゅうっと腕が伸びてきて、キャビネットの辺りを探り始めた。目当ての時計をガッチリと捕まえると、解除スイッチを押す。そして金槌音が止み主人も起きて、今朝も時計は勤めを果たすはずだった……が。

「……くー……」

主人は起きなかった。主人は朝にめっぽう弱かったのだ。しかし“朝起きの神”は仕事熱心な時計を見捨てはしなかった。

「くー……」

《きゅうっ》

何者かが身体を絞めつけた。

「……ぅん？……ッッ！！？」

《ガバッ！！》

ふかふかの羽毛布団が勢いよく捲れ上がった。

「すぅ……すぅ……」

「のっ、のわぁぁぁあああッッ！！」

暁彦の悲鳴が屋敷中に響き渡った。それもそのはず、暁彦の身体には、しがみついて気持ち良さげに眠る、華恵の姿があったのだから。しかもキャミソールにショーツだけの、下着姿なのだから暁彦も余計に焦る。暁彦の悲鳴に華恵がうっすらと目を開けた。

「……んぅ？」

「かっ、華恵ッ！！お前何してんだよッ！！」

「……暁彦、おはよ……」

「あ、おはよう……じゃなくてッッ！！」

まだ覚醒しきれずにとろんと微睡んだ瞳で挨拶する華恵。暁彦はつ

られて普通に挨拶を返すが、瞬時に置かれた状況を再認識した。

「とにかく離れろッ！！」

「……くぅ」

「寝るなッ！」

《ポコッ》

華恵の頭を軽く叩くが効果は全くなかった。眠り姫は気持ち良さそうに寝息をたてる。

「ったく……この寝坊助は……」

クシャクシャの猫っ毛で真っ赤なショートヘア、ルビーのような紅色の瞳。黄と黒の縞模様の獣耳と尻尾。まだあどけなさ残る少女は、甘えるように身体にしがみついて、無防備な寝顔をこちらに向ける。少女が屋敷に来てから数週間。少女はこんなにも安心して信頼を寄せてくれる。

「（こんな娘が危険な目にあってるなんて……俺はどうしたら……？）」

少女の猫っ毛を優しく撫でながら、暁彦は自分が出来る事を探してみる。が、やはり良い案など思い浮かびそうもなかった。

《コンコンッ》

不意に扉がノックされる。いつものように躊躇なく返事をするが。

「はーいっ、入っ……ちゃ駄目ぇっ！！」

「えっ？」

躊躇なく返事をした後に、自分の置かれている状況に気付いた。しかし“時既に遅し”。ガチャリと扉が開き、見知った顔が覗く。

「！？」

「ち、違うんだ、葉月さんッ！！これは華恵が寝ぼけて、俺のベッドに潜り込んで……！！」

顔を覗かせたのは葉月で、暁彦の置かれた状況を見て言葉を失った。間違いなく誤解している葉月に弁解する暁彦。しかしわかってもらえるはずもなく。

「ふっ……不潔ーーーッッッ！！！」

《パッカーンッッ！！》

「べぽらっぷッッッ！！」

素敵な金槌音が屋敷に響き渡った。

「ったく、華恵のおかげで朝から散々な目にあった……」

「いやぁ～、ごめんごめんっ」

妙にくぐもった声で話す暁彦。なぜなら暁彦の顔面には、まるでゴム膜を押し付けたように、輪郭がはっきりとわかるほど“フライパン”がめり込んでいた。華恵は無邪気に笑って見せた。

「『ごめん』で済むかッ！？顔面すげぇ痛いし、葉月さんには誤解されたままだし……二度とすんなよッ！！」

「えぇ～～っ」

「『え～』じゃないッ！」

「うー……」

華恵はしょんぼりと俯いてしまった。そして潤んだ瞳で上目使いに暁彦を見つめた。

「だって、暁彦抱き心地いいし……なんか、おじいちゃんみたいな匂いがして……安心出来るんだよねっ」

「お前、それって……」

照れたようにはにかむ華恵。暁彦はそんな華恵にドキッとしてしまう。

「（……じいちゃんみたいな匂いって……“加齢臭”じゃねぇか……）」

《ずーーん……》

「なんで落ち込んでんの？てか、そのフライパンいつまでつけてるつもり？」

暁彦はフライパンをめり込ませたまま、地面に項垂れショックを受ける。暁彦はまだ２０歳になったばかりだったが、自分にはもう加齢臭が出ていると勘違いして落ち込んでいた。

◇　◇　◇　◇　◇

所長室にて、今日も日課の所長業務をこなす暁彦。最近は慣れてきて、一人で任されることが多くなってきた。初めに比べ目覚ましい成長である。

「え～っと、今日は……ん、手紙？」

白い便箋に包まれた手紙だった。宛名は叔父の孝章宛てだった。

「差出人は……立花（たちばな）、楓（かえで）……？」

叔父宛ての手紙だが、所長不在の今、代理である暁彦しかいない。不謹慎かもしれないが、手紙に目を通すことにした。

『拝啓、霧ヶ崎孝章様

お久しぶりです、覚えておいででしょうか？大学院時代お世話にな

った立花です。あの件では、大変感謝しております。霧ヶ崎講師のおかげで今の私達があると思っています。あの娘達もすくすく成長して、今ではやんちゃな盛りです。あの娘達には手を焼かされていますが、毎日充実していて楽しいです。

話は変わって本題に入ります。実は私達の住んでいる街でも、組織が動いているという情報を入手しました。相変わらず、表沙汰にはなっていませんが、裏では派手に暴れているそうです。いくら保護条例が公認されていても、陰で襲われては政府も動けません。この娘達のこともありますし、近々そちらに向かわせていただきます。この娘達だけは何としても守らなければ。それではお会い出来るのを楽しみにしています。

敬具、立花楓』

綺麗な文字でまとめられた手紙。叔父に対する信頼の気持ちが伝わってくる文面だった。

「（『組織』ってまさか……華恵を襲ったハンターの事か？他の街でもハンターの脅威に曝されているなんて……。とりあえず、この“立花”さんと話してみる必要があるな……）」

暁彦は胸の不安感を掻き消すように仕事に打ち込んだ。

◆◆◆◆◆

その日も生憎の悪天候だった。大粒の雨がザンザンと降り注ぎ、至るところで水溜まりを作る。このような天候が2、3日続き、屋敷の皆もうんざりしているようだった。

「こう雨ばかり降られてしまうと、お洗濯物が外に干せなくて困るわ」

頬に手を当てて溜め息をつく茉奈。屋敷には乾燥機も乾燥室もあるのだが、彼女曰く天日干しの方が効果的なのだそうだ。

「オラオラッ！どけどけーッ！」

「かっ、華恵ちゃん！そんなに走り回ったら危ないよっ！」

茉奈の隣で、床の絨毯に掃除機をかけながら勢い良く走り回る華恵。と、それに翻弄される葉月。

《シュルシュル……》

「わっ、わあっ！」

華恵の操る掃除機の配線コードが葉月の足に絡み付く。絡み付けたまま、華恵はあっちへこっちへ駆け回るものだから、葉月はバランスを失って。

「きゃあっっ！！」

《ドテンッッ！！》

床に尻餅をついてしまった葉月。幸い床は絨毯なので怪我はなかったが、華恵はそれを見てケラケラ笑った。

「葉月ってドジ～」

「もーっ！華恵ちゃんのせいでしょっ！」

葉月は尻餅ついたお尻を擦りながら、恨めしそう華恵を見つめる。

「華恵ちゃん、お仕事の際中はふざけてはいけませんよ」

「えへへ、ごめんなさい……葉月もごめんね」

「もう、いいよ」

素直に謝る華恵に葉月は笑顔で答えた。葉月も、華恵がわざとではない事を知っていたようだった。茉奈はそんな2人を優しく見守っていた。

《リンゴーン……》

玄関の呼び鈴が鳴る。

「お客様ね。葉月ちゃん、華恵ちゃんお願い」

「はいっ」

「アイサー」

茉奈が言うと、葉月と華恵は玄関の扉の両側について引き開ける。その途端、開いた扉から雨風が吹き込み、紛れて客人と思われる人も飛び込んできた。

「あぁーっ、まったくひどい雨ねー。ふたりとも大丈夫、濡れてない？」

レインコートを羽織った大人と2人の子供。レインコートを頭まで被っているので顔までは見えないが、大人は声からして女性だと思われる。葉月と華恵は外に人がいない事を確認すると扉を閉じた。

「遠路遥々、お疲れ様でした。ようこそ、ＨＯＥへ」

「これはどうもご丁寧に……おっと」

茉奈につられて頭を下げる女性。途中でフードを被っていることに気付いたのか、フードを外した。

「はじめまして、立花楓です」

切れ長の目にアメジストのような薄紫の瞳、そしてフレームレスの眼鏡。黒色の髪を玉状にシニヨンで束ね、穏和な表情を浮かべる女性。

「私は茉奈と申します」

「葉月です」

「華恵だよ、よろしく」

順々に自己紹介し、お互いに握手を交わす。握手し終えると、楓は3人を見回した。そして言いづらそう口を開いた。

「最初に謝っておくわ。傷付けてしまったならごめんなさい。あなた達……“亜人種”よね……？」

楓の一言で空気が重たくなった気がした。表に出さないまでも、実

際に葉月と華恵は胸を締め付けられる思いだった。しかし、茉奈は何事もなかったように平然と答える。

「はい。私も、葉月ちゃんも、そしてこの華恵ちゃんも、亜人種です。ここには、私達以外にも数十人の亜人種達が暮らしています」

初対面の人間に躊躇いもなく、自信を持って「亜人種だ」と答えた茉奈。葉月はそんな茉奈を凄いと思った。なぜなら、もし葉月が茉奈と同じ立場になった時、茉奈のように自信を持って答えられたかどうか、わからなかったからだ。

「そうっ、その言葉を聞いて安心したわ。教授の言った通り、ここなら安全ね」

茉奈の言葉を聞いて、嬉しそうに笑った楓。

「変なことを訊いてごめんなさい、これには理由があるの」

楓はしゃがみ込むと、後ろに隠れていた2人を前に出した。楓は2人のフードをそっと外す。

「えっ！？」

「わっ！」

「まぁっ……」

葉月、華恵、茉奈の3人は子供達を見て驚いた。なぜなら子供達は全く同じ顔をした少女だったからだ。淡い桃色の長髪を2つのリボンで結わえたツインテールヘア。イエロートルマリンのような黄色

い瞳が不安そうにこちらに向けられている。そして何よりも、桃色の髪から覗く純白の獣耳。少女達もまた“亜人種”だったのだ。

「さっ、ご挨拶して」

「……」

「……っ」

いきなり人前に出されて、もじもじする少女達。視線がキョロキョロと定まらず落ち着かない。

「あたし、双子って初めて見たーっ。ホントそっくりなんだね、かわいいーっ」

「ッ！？」

華恵が少女達の頭を撫でようと、両手を出した瞬間。少女達はビクッと体を震わせ、直ぐ様楓に抱き付いた。

「あ、ありゃ……」

「やっぱ駄目かぁ……ごめんね、この娘達人見知りが激しくて」

少女達は必死に楓に抱き付く。怯えているのか、涙目になりながら小刻みに震えていた。そんな少女達にそっと近付く葉月。少女達と同じ目線に合わせるようにしゃがみ込む。

「こんにちは、私は“葉月”って言います。お姉ちゃんにあなた達ふたりのお名前、教えてくれないかな？」

少女達を恐がらせないよう優しく微笑む葉月。

「ぁ、ぅ……」

「ぅ……」

「うん？」

少女達の視線が向けられる。変わらず微笑む葉月。

「さ、ぇ……です……」

「……さ、き」

集中しなければ聞き取れないような、小さく弱々しい声だった。しかしそれでも少女達は自分の名前をしっかりと口にした。

「そうっ！『さえ』ちゃんに、『さき』ちゃんて言うんだっ！かわいいお名前だねっ！」

葉月は嬉しそうに笑った。少女達が自分で名前を教えてくれたことがなにより嬉しかったのだ。

「……葉月ちゃん、あなたすごいわねっ！沙詠（さえ）と沙癸（さき）が自分から挨拶するなんて……初めてじゃないかしらっ！」

「大したことじゃないです。ただ……素敵な名前なんですもの、本人の口から聞きたくて」

沙詠と沙癸が初めて見せた行動に驚いた表情を見せる楓。葉月はそれほど少女達の警戒心を緩ませたのだろう。

「なんか、複雑ぅ」

「まぁまぁ、華恵ちゃん。仕方ないですよ」

ふてくされた様に口を尖らす華恵。自分ではなく葉月に心を開いたのが面白くないのだろう。茉奈はそんな彼女を宥めていた。

「さぁ、濡れたままでは風邪を引いてしまいます。お部屋にご案内いたしますね」

「お願いするわね」

「荷物、預かるよ」

「私、タオル持ってきます」

楓達を部屋へと案内する茉奈。華恵は楓達の荷物を、葉月はタオル取りに、それぞれの行動へと移った。

◇　◇　◇　◇　◇

「どうぞ、タオルです」

「ありがと」

葉月からタオル受け取る楓。楓はすぐに沙詠と沙癸の頭を拭き始めた。

「こら、沙癸っ。動かないの、頭拭けないでしょ」

「ぅ、やぁ……」

沙癸は嫌がりぐずるのだが、楓はそれを許さない。濡れたままにしておくと風邪をひかねないからだ。葉月はそれを見て微笑んだ。

「ふふっ」

「ほらぁ沙癸、沙癸がイヤイヤするから葉月お姉ちゃんに笑われちゃったわよー？あー、恥ずかしい」

「……ぅ？」

「さきちゃん、がまんがまん」

沙癸の頭をぽんぽんと叩く沙詠。どうやら沙詠の方がお姉さんらしい。沙癸も沙詠に諭され、大人しく頭を拭かれた。

楓達が体を拭き終えた頃、葉月を呼び止めた。

「葉月ちゃん、お願いがあるんだけど……」

「はい、何でしょう？」

楓は拭き終えたタオルを葉月に手渡す。葉月はそれを受け取りながら答えた。

「これからお仕事の話をしなくちゃならないの。それでその間だけ、沙詠と沙癸の面倒を見てもらえないかしら？」「私は大丈夫ですけど……沙詠ちゃんと沙癸ちゃんが……」

葉月は沙詠と沙癸に視線を送る。問題は彼女達の極度の人見知り、今日初めて会った人と大人しく待つ事が出来るのだろうか。案の定、彼女達も戸惑っている様子だった。そんな葉月の心配を他所になんのその、と楓。

「あーっ、大丈夫大丈夫。ふたりとも、葉月お姉ちゃんとなら大人しく待っていられるわよね？」

「う……」

「え……」

「うんっ！大丈夫だって！」

「……全然、大丈夫そうに見えないんですが……」

明らかに不安そうな沙詠と沙癸を見て、笑顔で「大丈夫」と頷く楓。葉月は今にも泣き出してしまいそうな2人を見て、余計心配になった。

「大丈夫よ、沙詠と沙癸もあなたにはなついているようだし」

「でも、今にも泣き出しそう……」

「葉月ちゃんじゃあなかったら、もうとっくに泣き出してるわよ」

沙詠と沙癸に聞こえぬよう、楓は葉月に耳打ちをする。

「とにかく、葉月ちゃんなら大丈夫。どうしようもなくなった時はここへ戻ってきて」

「でっでも、楓さ……」

《きゅむっ》

「えっ？」

ふと、スカートを引かれた感じがした。下に視線を配ると、そこには少女達が立っていた。

「はづき、お姉、ちゃん……」

「……よろしく、おねがい、します……」

不安と戸惑いが入り雑じった表情で、葉月を見上げる沙詠と沙癸。葉月のスカートを握り締めながら、泣いてしまいそうになる事を必死に堪えているようだった。この娘達の年代ならば、堪えきれずに泣き出してしまう娘もいるだろう。しかし、彼女達は泣くどころか、葉月に自らお願いする。葉月は思わず彼女達の強さに心を打たれてしまった。

「面倒みてもらえる？」

「はいっ、私でよければっ！」

穏やかな表情を浮かべる楓に、少女達の頭を優しく撫でながら、笑顔で答える葉月だった。

◇　◇　◇　◇　◇

「沙詠ちゃん、沙癸ちゃん、何しよっか？」

沙詠と沙癸の手を繋ぎながら並んで廊下を歩く葉月。少女達は葉月に視線を返すが、困った表情をしていた。

「屋敷を探検する？それともお部屋で遊ぶ？」

「たんけんっ！」

「お部屋であそびたいです……」

沙癸は「探検」、沙詠は「部屋で遊ぶ」と見事に意見が割れた。

「う、う～ん……困ったね。どっちがいいかな？」

「おや、葉月？」

聞き覚えのある声に名前を呼ばれ、視線を向けると椿が立っていた。手には棒状の布袋が抱えられている。葉月はそれが何か直ぐにわかった。

「椿さんっ。弓のお稽古ですか？」

「あぁ、今終わった所だよ。……この娘達は？」

椿は葉月の両脇にいる沙詠と沙癸に気付く。沙詠と沙癸は警戒して葉月の後へとに隠れた。

「今日来られたお客様の連れで、沙詠ちゃんと沙癸ちゃんです。面倒を見て欲しいと頼まれて」

「そうか、可愛らしい娘達だな。沙詠、沙癸、私は椿だ。宜しくな」

椿はしゃがむと沙詠と沙癸の目を見て微笑んだ。警戒心を感じ取ったのか、それ以上のスキンシップを図ろうとはしなかった。

「そうだ、良いものをあげよう」

椿は懐に手を入れるとゴソゴソとまさぐる。沙詠と沙癸はそれを葉月の後から興味津々に覗いていた。そして懐からそれを取り出した。

「これだ」

「あっ、チョコレート。いいんですか？」

「後輩の娘に貰ったものなんだが、私よりこの娘達に食べてもらった方が良いと思ってな。皆で食べてくれ」

沙詠と沙癸もお菓子に目を輝かせる。椿はその板チョコレートを差し出した。沙癸はおずおずと前に出ると、恐る恐る板チョコレートを受け取った。

「……あ、ありが、とう……」

「あぁ」

辿々しくお礼を言う沙癸に椿は笑った。

「じゃあ、私は行くな」

「ありがとうございます、椿さん」

「何、気にするな」

「つばき、お姉ちゃん」

「ばいばい……」

「またな」

そう言うと椿はその場を後にした。

「良かったね、チョコもらえて」

「うんっ」

沙癸はチョコレートを片手に笑顔で頷いた。

結局、沙詠と沙癸の両方の意見を取り入れることにした。前段は部屋で遊び、後段は屋敷内を見て回ることにする。

葉月の部屋についてからは、葉月が趣味で集めたぬいぐるみでお人形遊びをしたり、トランプなどのボードゲームをして遊んだ。沙詠と沙癸はさっきまでの人見知りが嘘のように、はしゃぎ、笑い、明るくなった。「これが本来の彼女達の姿なのだ」と葉月は嬉しく感じていた。そんな時。

「はづきお姉ちゃん……」

「うんっ、なあに？」

沙癸が葉月に近付いて来た。沙癸は何故かもじもじしていた。

「……ぉ……っ」

「どうしたの？」

声が小さく聞き取りづらい。見る見るうちに沙癸は泣き出しそうになっていく。

「おしっこ……」

「えっ！？」

沙癸の突拍子のない言葉に葉月は焦る。沙癸はどうやらトイレに行きたいらしい。

「もれちゃう……」

「まっ、待ってね！今、連れてくから！あっ、でも、沙詠ちゃんが！？どっどうしよう！？」

沙癸をトイレに連れていこうにも、沙詠をこの場にひとり置き去りにするわけには行かない。そうこうしている内にも沙癸は限界に達しつつある。

「はづきお姉ちゃん、大丈夫です。わたしひとりで待ってられます」

「本当！？ごめんね、すぐに戻ってくるから待っててね！！」

「はいっ」

慌てる葉月にとって、沙詠の申し出はとてもありがたかった。沙詠をひとりにするのは心配だったが、背に腹は代えられない。

「はづきお姉ちゃんっ」

「はいはいっ！今連れてくから！」

葉月は沙癸を抱えて、慌ただしく部屋から出て行った。沙詠と静けさだけが部屋に残された。

「……ミーちゃん、いっしょにお留守番してね」

胸に三毛猫のぬいぐるみ「ミーちゃん（沙詠命名）」を抱えながら、葉月と沙癸の帰りを待つ沙詠。三人の時はあんなに笑い声で溢れていたのに、今はとても静かだった。

「……」

沙詠は静寂を嫌いではなかったが、独りでいるのが嫌だった。嫌というよりも恐ろしかった。いつも隣には楓や沙癸がいてくれた。楓と出会う以前の記憶はは殆ど無いが、胸を押し潰すような恐怖感だけが残されていた。ひとりでいるとその恐怖感が自分自身を飲み込む。それを紛らすように沙詠はぬいぐるみに顔を埋めた。

―……ぃ―

「……？」

一瞬、何か聞こえたような気がした。辺りを見回しても、自分一人しかいない。気のせいかと思った瞬間。

―……寂しい―

「えっ？」

今度ははっきりと聞こえた。耳に入ってきたのではなく、頭に響くような女性の声。

―……独りは、もう嫌じゃ……―

「……誰か、呼んでる」

悲しそうな声だったが、不思議と恐怖感はなかった。沙詠は部屋の扉を開けると、その声が強く聞こえる方へと歩いて行く。不思議な感覚だった。初めての場所の筈なのに、まるで昔から知っていたかのように進む方向がわかった。

「こっちなの」

何度曲がり、何度階段を下りたのか、沙詠は覚えていなかったが、迷うことなく目的の場所へとたどり着いた。しかし、たどり着いた場所には何もなく、行き止まりの壁だった。

「ここ……」

特に変わった様子はなく、ただ壁の色が他の壁にくらべ古いことくらいだった。迷うことなく、その壁に手を触れる。

《ヴンッ！》

不思議なことに、壁が青白い光に包まれたかと思うと、沙詠は吸い込まれるように壁の中へと消えた。青白い光が止むと、そこには沙詠の持っていた三毛猫のぬいぐるみだけが床に転がっていた。

「沙癸ちゃん、これからはギリギリまで我慢しないで先に言ってね？」

「ごめんなさい……」

部屋に戻ってきた葉月と沙癸。葉月は一早く異変に気付いた。
「（あれ、扉が開いてる……閉めていった筈だけど）」
「さえお姉ちゃん、ただいま……あれ？」
部屋を覗くと沙詠の姿はなかった。葉月の顔から血の気が退く。
「沙詠ちゃんっ！！」
「っ！？」
葉月の大声に驚く沙癸。葉月は必死に部屋を探し始めた。
「沙詠ちゃんっ！！沙詠ちゃんどこっ！？」
ベッドの下、机の下、クローゼットの中、隠れられそうな場所は全て探したが、沙詠を見つける事は出来なかった。
「（私の……私のせいだ！私があの時、目を離さなきゃ！！沙詠ちゃんを1人にしなきゃ！！）」
「は、はづきお姉ちゃん……」
葉月の取り乱す姿に沙癸は面を食らっていた。
「……っ！！」
「わっ」

葉月は沙癸の手を掴むと部屋から出て廊下を駆け出した。

「まさか、所長さんがこんなに若い人だなんて思わなかったわ」

「はは、僕も所長代行するなんて思いもしませんでしたよ」

客室で雑談する暁彦と楓。孝章がいると思っていた彼女は、孝章がいない事実を知って驚く。さらに代行で出てきた暁彦に驚いていた。

《……タタタタッ！》

「ん？」

途端に足音が聞こえてきたかと思うと、客室の扉が勢いよく開け放たれた。

《バタンッ！》

「はぁっ、はぁっ」

「ひぐ……ぐすっ……」

そこに現れたのは、肩で息をする葉月と泣きじゃくる沙癸。ただならぬ雰囲気に、暁彦も楓も唖然とする。

「葉月さん……？」

「ど、どうしたのよ？」

「あのっ！沙詠ちゃん、沙詠ちゃん来てませんかっ！？」

「沙詠？来てないけど……？」

「そ、そんな……」

その場に崩れ落ちる葉月、表情がくしゃくしゃに歪んでいく。

「葉月さん、何があったの？」

「沙詠ちゃんが……沙詠ちゃんが……！！」

「沙詠が……いなくなった……！？」

暁彦と楓の表情に緊張が走った。

◆◆◆◆◆

「ぅん？」

はっと我に返る沙詠。どうやら気を失っていたらしい。

「ここ、どこ？」

辺りを見回すと洞窟のような場所だった。洞窟の中は気温が低く、ひんやりと湿気を帯びていた。不思議な事に、灯りがどこにも見当

たらないのに、洞窟の中はぼんやりと明るい。

「さむい……」

沙詠は身体をを手で擦り、寒さを紛らわせようとする。今までの経緯を思い返す。部屋で女性の声が聞こえ、それに導かれるようにこの場所に来た。部屋からこの場所に来るまでは、記憶が曖昧になっている。

「あの声の女の人を探さなきゃ……」

このまま、ここへ踞っていても仕方がない、沙詠はそう言うと洞窟を進み出した。地面は岩肌で、足場が悪い。所々水溜まりが出来ていて、注意して歩かないと足を突っ込んでしまいそうだ。洞窟内には沙詠の息遣いと、水の滴る音のみが響いていた。

「（わたし、どうしてここにいるの？ここはどこなの？）」

頭の中をぐるぐると回る疑問、いくら考えても答えは出ない。

《ガッ！》

「あぅっ！」

沙詠はそのまま地面に突っ伏してしまった。バシャンと水飛沫が飛ぶ、水溜まりに上半身から浸かってしまった。地面の窪みに足を取られたらしい。衣服はずぶ濡れになってしまったが、水溜まりのおかげで怪我はなかった。沙詠はすぐに上半身を起こす。濡れた衣服が肌に吸い付き、冷たさを感じた。

「ひぅっ……ふぇっ……」

沙詠はついに耐えきれなくなり、嗚咽を漏らし始めた。

「もぅ、いやぁ……かえでお姉ちゃん……さきちゃん……はづきお姉ちゃん……」

ポロポロと大粒の溢す沙詠。暗闇にひとり放り出され、怖くて、心細くて、泣くことしかできない。

「……うっく……ぅん……？」

その時、奥にぼんやりと光が見えた気がした。気のせいかと思い目を擦るが、確かに淡い光が見える。

「なに……あれ……」

まだ涙の溢れる目を擦りながら、足に力をいれて立ち上がる。とぼとぼと危なかしい足取りだが、一歩一歩しっかりと進んで行く。すると開けた場所に出た。中央には神社にあるような祭壇らしき小屋が置かれていた。光はその小屋から漏れていた。

「赤い光……」

沙詠はその祭壇に誰か人がいるのではないかと、期待しながら歩み寄る。近くに来ると、その祭壇が相当古いものであることがわかった。障子が貼ってあったと思われる襖は、長年の年月によりほぼ骨組みだけとなっている。沙詠はその骨組みの隙間から祭壇の中を覗いた。

「何か……光ってる？」

祭壇の中は四畳ほどのスペースがあり、中央の神棚で何かが発光していた。誰か人がいると思っていた沙詠はがっかりとしたが、新たにその発光物に興味がわいた。立て付けの悪い襖を何とかこじ開け、祭壇の中に入る。そして中央の神棚まで来ると、おそるおそる中を覗き込んだ。

「わぁ……」

神棚の中にあったのは真っ赤な水晶だった。球状で沙詠の拳ほどの大きさ、中心部はキラキラと輝いており、淡い光を放っていた。沙詠はその宝石に見とれていた。

「赤くて、きれい……」

そっと手を伸ばす沙詠。指先が水晶に触れようとした瞬間、水晶は強く光を放った。

「きゃっっ！！」

沙詠は驚いて手を引っ込める、あまりの眩しさに両手で目を覆った。

「ぅ……」

数秒経つと光は徐々に止んでいき、やがて発光しなくなる。そして不意に声がした。

「……人間、か？」

「えっ！？」

沙詠は驚く、どこからともなく声が聞こえてきたのだ。キョロキョロと辺りを見回すのだが、先ほどの光で目が眩んでしまったため、よく見ることができない。

「だれっ！？どこっ！？」

「何処を見ておる？ここじゃ、ここ。目の前じゃて」

ようやく目も慣れ、辺りを確認出来るようになったが、声の主を見つけることが出来ない。

「『目の前』って、玉しかないよ？」

「なんじゃ、しっかり見えておるじゃないか。その珠こそが妾じゃ」

「えっ！！」

珠をよく見ると、言葉に合わせて微妙に発光しているのがわかる。

「……赤い玉さんが、わたしに話しかけてるの……？」

「先程からそうだと言っておろう」

初めての経験で信じられないが、どうやら本当に珠が話しかけているらしい。喋る珠なんて見たことも聞いたこともない。沙詠は戸惑いを隠せなかった。

「どうして……玉、なんですか？」

「む……？まぁ、その……色々と事情があるんじゃ。それよりも……」

沙詠の質問をうやむやにして誤魔化す赤い珠。どうやら触れられたくない事情らしい。珠は話題を変えた。

「童、ここへ何をしに来た？」

「『わらし』じゃなくて、“さえ”です。わたしもどうしてここへ来たのか、わからないんです。ただ、声が聞こえてきて……あっ！」

自分で言って気が付いた。あの時、葉月の部屋で聞こえた声と珠が発する声、その声が似ていたのだ。

「あなたが、わたしを呼んだの？」

「『呼んだ』……？妾がか？」

沙詠は頷いた。珠は見に覚えがないといった感じだ。

「『さびしい、もうひとりはいやだ』って。あの時、聞こえてきた声とあなたの声がにていたんです」

「……妾は知らん。言うてもおらんし、お前を呼んだ覚えもない」

口調が冷たくなった気がした。怒らせてしまったと、沙詠はしょんぼりした。

「そう……」

「……」

「……」

「……」

会話が無くなってしまった。沈黙が辺りを支配しようとした頃。

「……でも、わたし“タマちゃん”に会えて良かったです」

「『たまちゃん』？それは妾の事を言うておる……わわっ！！」

不意に身体が浮くのを感じた。沙詠が両手で持ち上げたのだ。といっても身体は珠なのだが。

「さっきまでひとりで心細かったけど、今はタマちゃんがいるから大丈夫。これからよろしくね、タマちゃんっ」

「妾は童と馴れ合うつもりなど……うわわわっ！！止せっ！振り回すなぁっ！！」

珠を抱えたまま、くるくると回る沙詠。何はどうであれ、話し相手が出来たことが嬉しかった。

◇　◇　◇　◇　◇

「そんな、これだけ探しても見付からないなんて……」

茉奈は捜索隊の報告を受け嘆いた。沙詠が行方不明になった事を聞いて、すぐに捜索隊が組まれた。沙詠がいなくなったのは午後2時頃、現在時刻は午後6時。かれこれ4時間ほど経過していた。いくら広い屋敷内とはいえ、使用人総出で探しているのに手掛かり一つ見付からないのはおかしい。外は未だに大雨が降り続いていた。

「この雨で外に出ることは考えられねぇが、一応これから外も探してみる」

「お願いします、カジさん……きゃっ」

突然、茂雄は茉奈の頭をワシワシ撫でた。

「なんてぇ顔してやがんだ。そんな顔してたら、嬢ちゃんも出て来るに出て来れねぇだろ」

暗い顔をする茉奈を元気付けようとしてやった事だった。最初は驚いた顔をしていた茉奈も、茂雄の気持ちが伝わると笑顔になった。

「ふふ、そうですねっ」

「うしっ、その面だ！……って、おめぇもだぞ、葉月っ！！」

「ふっ……うっ……」

葉月は子供のように泣きじゃくっていた。沙詠がいなくなったのは自分の責任だと思い込んでいるのだろう。

「情けねぇ面すんじゃねぇよ」

「……だって、わた、しが……私が沙詠ちゃん、しっかり、見ていたら……こんなことにはっ……すみませっ、すみませんっ！！」

自分を責め続け、楓に何度も謝る葉月。涙が幾筋も頬を伝う。茂雄は葉月の頭もワシワシ撫でていた。

「葉月のせいじゃねぇ、自分を責めるな」

「でもっ、でも……」

「そうよ、葉月ちゃんたら考えすぎよ。お腹が空いたらすぐ出てくるって……」

《カタカタ……》

「（楓さん……）」

しかし、暁彦は見逃さなかった。楓が必死に身体の震えを押し殺しているのを。娘を心配しない親がいるわけがなかった。

「みんなーっ！！」

「華恵、見つかったのか！？」

大声をあげて走って来る華恵に視線が集まる。沙詠が見つかったのではないかと皆期待した。

「暁彦、ごめん。こっちは見付かってない。だけど、手掛かりになるかもしれない」
華恵はそう言うと、右手に持ったそれを差し出した。それは三毛猫のぬいぐるみだった。
「猫のぬいぐるみ、ですか？」
「一階の物置部屋の近くに落ちてたんだ。今、椿が調べてる」
「楓さん、これ沙詠ちゃんのじゃないですか？」
暁彦は華恵からぬいぐるみを受け取ると、楓に差し出した。しかし、楓は首を横に振った。
「沙詠のじゃないわ」
「っ……ぬいぐるみ？見せてくださいっ！！」
いきなり暁彦と楓の間に割って入ってきた葉月。暁彦と楓は驚いた。
「これっ！！私の部屋で沙詠ちゃんが遊んでいたぬいぐるみですっ！！」
「葉月さん、本当に！？」
「はい、元は私のものだったんですけど、沙詠ちゃんが気に入ってくれて、あげたんです」
「ということは、そのぬいぐるみが落ちていた物置部屋の近くに、

沙詠ちゃんがいるかもしれませんね」

「みんな、行ってみよう！」

暁彦、葉月、茉奈、華恵、楓の四人は物置部屋へ。茂雄には外への捜索にあたって貰うことになった。

結局、その日沙詠を見付けることが出来なかった。あの後、物置部屋付近を調べたが、ぬいぐるみ以上の手掛かりを掴む事が出来ず、捜索も明日の早朝まで中断された。しかし、暁彦は諦める事が出来ず、消灯後物置部屋へとやって来たのだった。

「（あれ……？誰か、いる？あれは……）」

物置部屋の近くにやって来た時、人影を見付けた。人影は辺りを忙しなくウロウロとしていた。

「沙詠……沙詠、どこなの……？お願いだから、出て来て……」

「楓、さん？」

「！」

人影は名前をよばれるとビクリと身体を震わせた。

「……暁彦くん」

「楓さん、少し休んだ方が……」

今さっきまでずっと探し続けていた楓。ろくに休んでいないはずだ。

「休んでなんていられるわけないじゃない！！沙詠はまだ見付かってないのよ！？」

いきなり吼える楓。彼女は取り乱し、冷静さを失っていた。暁彦はそんな楓に動ずることなく、ただ静かに見つめていた。

「……っ！ご、ごめんなさい……私ったら」

「いえ、気持ちはわかりますから」

我に帰る楓、自分を見失うほどに彼女は沙詠の事を心配していた。

「どう、しょ……どうしよ、暁彦くん……あの娘、今頃独りで泣いてるわ……」

「大丈夫……大丈夫ですよ、きっとすぐに見付かりますから。沙詠ちゃんがいつ帰ってきてもいいように、いつも通りの楓さんでいましょう」

「うん……うん……」

涙を見せる楓をそっと宥めながら、暁彦は微笑んだ。楓も段々と落ち着きを取り戻し始めた。

「恥ずかしいトコ、見せちゃったわね」

「みんなには内緒にしておきます。後は僕にまかせて、楓さんも休んでください」

「うん、ありがとう。そうさせてもらうわね……」

楓はそう言うと、その場を後にした。

「……」

暁彦は疑問を抱えていた。これだけ探しても見付からないのは、やはりおかしい。暁彦は沙詠に会ったことはないが、楓から聞いた沙詠の性格上、極度の人見知りで内気な彼女が自分からいなくなるのはありえない、況してや子供だ。内部の人間が沙詠を？それこそ考えにくい。このＨＯＥの住人がそんなことをするわけがない、暁彦は住人達を信頼していた。外部の人間の犯行？いや、この屋敷は防犯設備が整っていて、外部の人間が易易と侵入出来るはずがない。しかも外部から侵入した形跡は全くない。その他の要因として考えられるのは。

「……事故？いや、見た限り安全対策も万全だし、事故が起きそうな場所なんて……ん？」

暁彦はふと気付いた。正面にある行き止まりの通路。その部分だけ壁の色が違う、古びた色をしていた。

「ここだけ、壁の色が違う……いや、古いのか。そういえば『何年か前に改築した』って葉月さんが言ってたっけ」

この色の違う壁は、改築する前の屋敷の壁なのだろう。壁に触れて

みたが、特に変わった様子はない。ぬいぐるみはこの突き当たりの壁に落ちていた、と華恵は言っていたが、近くに手掛かりは無さそうだった。

「……くそ、手詰まりか」

暁彦は舌打ちすると、壁を背もたれにドカッと座り込んだ。あれやこれやと思考を巡らすが、沙詠に繋がる道筋は見えてこない。

「沙詠ちゃん……」

暁彦に諦めの文字が浮かびそうになった時、それは起きた。

―……なっ……うっ―

「うん？」

何か聞こえた気がした。空耳かと暁彦は思ったが。

―……皆、先に逝ってしまう……―

「！」

次は、はっきりと聞こえた。どこからともなく聞こえてくる悲し気な女性の声だった。

―……それならば、いっその事、初めから人との関係を持たなければ……―

「（この頭に響いてくる感じ……前にも、どこかで）」

暁彦がこのような経験したのは二度目だった。一度目は華恵を丘で見付けた時、彼女の心というか思いのような声が聞こえた。これも誰かの心の声なのだろうか。

―……この思い、せずに済むのかもしれぬ……―

その声が頭に響いた瞬間、いきなりもたれ掛かっていた壁が、眩い光を放った。

《ヴンッ！》

「なっ！？」

突然のことで対応出来ない暁彦。続いて脳が揺れるような感覚、自分の身体が自分のものでないような嫌悪感を感じさせた。そして身体がズブズブと壁に飲まれていく。

「うっ！くそッ！」

必死に抵抗しようとしても、暁彦ひとりではどうすることも出来ない。青白い光が再び強く発光した。

「うわぁぁああッッ……」

暁彦の声がぱったりと止む。徐々に光も収まり始め、視界がはっきりする。そこには最初から誰もいなかったように暁彦の姿は消えていた。

◆◆◆◆◆

「タマちゃん」

「何じゃ？」

「タマちゃんは、ずっとここにひとりで住んでいるんですか？」

「そうじゃ」

「どれくらい？」

「かれこれ……三百年くらいかの」

「３００年っ！？すごく長生きなんですね……。でも、そんなに長い間、ずっとひとりで、さびしいと思ったことないんですか？」

沙詠の質問に珠は沈黙した。また、怒らせてしまったのか、それともただ聞いていなかったのか、沙詠はわからない。

「……わからぬ」

「えっ？」

珠はぽつりと呟くように言った。

「わからないんじゃ……。大抵の奴は妾を見ると、畏れて逃げ行く。妾はいつも独りじゃったし、それが普通じゃと思っていた。今までも、そしてこれからもな」

珠は孤独だった。畏れられ、避けられ、忌み嫌われ、ずっと独りで生きてきた。沙詠は亜人種である自分と、どこか共感を覚えていた。

「……かえでお姉ちゃんがよくわたしに言ってくれるんです」

「……？」

ふと、沙詠が口を開く。珠はそれを静かに聞く。

「『沙詠、友達をいっぱい作りなさい。一緒に笑ったり、泣いたり、ケンカしたり……そんな友達がいっぱい出来たら、毎日がきっと楽しくなるわ』って」

「『友』か……」

沙詠はコクリと頷く。

「わたし、はずかしがりやで……なかなか友達できなくて。でもねっ！今日、はづきお姉ちゃんがいっしょにあそんでくれて、とってもうれしかったっ！」

「（そうか、此奴も……）」

嬉しそうに笑う沙詠。沙詠もまた孤独だったという事に珠は気付く。

「タマちゃんとわたしも、もう“友達”だよねっ！」

「沙詠……」

屈託の無い笑顔を向けてくる沙詠。珠には少女の笑顔が眩しすぎた。

同時にこの純粋無垢な少女を傷付けてしまうのではないかと躊躇してしまった。

その時。

「……ぁぁぁぁぁぁぁッッ！！」

《ドッスーンッッ！！》

「！」

「ひっ！？」

誰かの絶叫と、重たいものが落下したような音が聞こえてきた。突然の物音に沙詠は恐怖を感じる。

「た、タマちゃん……今の、なに……？」

「わからぬ。じゃが、もうひとり来たようじゃ」

「えっ？」

恐る恐る祭壇から、物音のした方向を覗き込む沙詠。そこにはひとつの人影が蠢いていた。

「てててて……ケツ打った……。一体、何が起こって……ここは？」

人影は辺りを見回し、すぐに祭壇がある事に気付いた。

「あれは……？」

人影は祭壇に向かって近付いて来る。沙詠は思わず祭壇内へと隠れた。

「っ！」

「……沙詠、何故隠れる？」

「（こわい人だったらどうするの！？）」

「普通は妾のような異形なものに恐怖を感じるのじゃが……」

喋る珠よりも人が恐い沙詠。その辺りが何とも純粋な彼女らしい。

「沙詠ちゃーん！！いたら返事をしてくれーっ！！」

人影は大声を上げて少女の名前を呼んだ。声からして男のようだ。

「（えっ……どうしてわたしの名前、知ってるの……？）」

「簡単じゃ、お前を探しに来たのじゃろう」

沙詠はもう一度、祭壇から覗き込む。そこには名前を呼びながら必死に探す、青年の姿があった。

「沙詠ちゃーん！！どこにいるんだーっ！！返事をしてくれーっ！！いないのか……んっ！？沙詠ちゃん！？」

「うっ！？」

目が合った。沙詠はまた思わず隠れる。青年は駆け出した。

「あっ……うっ……」

「じゃから、お前は何故隠れるんじゃ？」

「待って！！沙詠ちゃん！！沙詠ちゃんだろ！？」

祭壇の奥へと走る沙詠、しかし奥は行き止まりである。沙詠はその場に踞った。手の平の赤い珠をぎゅっと握った。

「タマちゃん……タマちゃん……」

「（この怯え様は異状じゃな……）」

「はぁっ、はぁっ」

祭壇の入り口まで来ると青年はゆっくりと沙詠に近付く。沙詠は怯えて、目を閉じ獣耳を両手で塞いでいた。

「っ……っ……」

青年は沙詠の前までやって来た。小刻みに震える沙詠を見て、その場にしゃがみ込む。

《スッ……》

青年は沙詠に向かって手を伸ばす。淡い桃色の髪に指が触れた。

「ひっ！！」

沙詠は短く悲鳴を上げる。昔の辛い過去を思い出しているのかもしれない。青年は優しく沙詠の頭を撫でた。

「っ……っ……ぅ？」

最初は怯えていた沙詠も、青年の手の温もりが伝わると、恐る恐る目を開けた。

「驚かせてごめんね、君が沙詠ちゃんだろ？」

そこには優しく微笑む青年の笑顔があった。沙詠は青年の顔を見つめる。

「楓さんから聞いて迎えに来たんだ」

「かえで、お姉ちゃんが……？」

「うん、みんなも心配してる。一緒に帰ろう」

「……うっ……ふぇっ……」

みるみるうちに沙詠の大きな瞳に涙が溜まる。溢れそうだと思った瞬間、沙詠は青年に抱き付いた。

「うわぁぁあんっっ！！」

「よしよし……よくひとりで頑張ったね、えらいえらい」

青年は優しく抱きしめながら沙詠を宥める。今まで張り詰めていた糸がぷつりときれたように、沙詠はわんわんと泣いた。

「（どうしてかな……この人は、こわくない……）」

青年の温もりを身体全体で感じながら、沙詠はそう思った。穴の空いた心が満たされていくように、青年の優しさと安心感にいつまでも包まれていた。

「落ち着いた？」

「っ……はいっ」

「そっか、良かった」

落ち着きを取り戻した沙詠を見ながら、優しく微笑む青年。彼は沙詠の隣に腰を下ろしていた。

「自己紹介がまだだったね、俺は暁彦、霧ヶ崎暁彦。ほら、沙詠ちゃん屋敷に来たでしょ？その屋敷で働いてるんだ。そこで、楓さんから聞いて沙詠ちゃんを探してたんだ。本当に見つかって良かった」

沙詠にもわかるように、暁彦はできるだけわかりやすく説明した。その甲斐あって沙詠は理解してくれたようだ。しかし、沙詠の表情は暗いままだった。

「……ごめんなさい」

「えっ？」

いきなり謝る沙詠。暁彦は不思議に思った。

「なんで謝るのさ？」

「いきなり、いなくなって……みんなに心配かけて……わたし、悪い子です」

「沙詠ちゃんのせいじゃないよ、あれは事故だったんだから」

「でも……きゃっ」

暁彦は沙詠の頭をわしわし撫でた。

「沙詠ちゃん……みんなね、何かしら迷惑なり心配なりかけちゃうものなんだよ。だから助け合って生きていく。沙詠ちゃんも心配かけた分、楓さんの言うこと聞いて助けてあげなきゃねっ！」

ニカッと笑う暁彦。沙詠は一瞬呆気に取られたが、暁彦を見ると笑顔で元気良く答えてくれた。

「……はいっ！」

「沙詠。お前、いつの間にか普通に会話出来てるじゃないか」

「えっ！？」

何処からともなく聞こえてきた声に、暁彦は驚いた。しかし暁彦は、予想外にも沙詠が全く驚いていない事に気付く。

「あっ、本当ですっ」

「珠が……喋ってるのか……？」

沙詠の両手の平に乗る赤い水晶の珠。沙詠は平然とその珠と会話していた。

「沙詠、見よ。これが妾を見る凡人の反応じゃ」

「そうなんですか？……あの、“タマちゃん”って言うんです」

「『タマちゃん』？」

未だに驚きを隠せない暁彦。どういう構造なのか、怪奇現象なのか、全くわからない。しかし何だか声に聞き覚えがある気がする。

「若造、よく迎えに来た。ピーピー泣いて、騒がしくて敵わんかったからの。早う連れて帰るが良い」

「タマちゃん、わたしそんな泣いてないですっ」

「先程までわんわん泣いとった癖によく言うわ」

珠と平然に会話する沙詠が凄く感じられた。驚いてばかりもいられず、暁彦は珠に話しかけた。

「珠さん、あの……」

「何じゃ？」

「見た感じ、この辺は行き止まりのようなんですが、帰り道とか知りませんか？もし、知っていたら……」

「知らん」

暁彦が言い切る前に珠に言葉を遮られた。

「そうですか……しゃあない、地道に探すか。沙詠ちゃんここで待ってて、ちょっと辺りを見てくるから」

「わたしも行きますっ」

「沙詠ちゃん、危ないかもしれないし。ちゃんと戻ってくるから、珠さんと待ってて、ね？」

「わたしもさがしますからっ！手伝わせてくださいっ！タマちゃんも手伝ってくれるよね！？」

「はぁっ！？何を呆けた事を……そのような事お前達だけで……うわわわわっ！！」

「タっマっちゃっん～～っ！！」

《ブンブンブンッ！！》

沙詠は珠を持った両手を上下左右に振り回す。

「振るなっっ！！わ、わかっ、わかったからっっ！！振るなぁっっ！！」

「はははっ、沙詠ちゃんには敵わないな」

「笑うてないで助けろぉぉっっ！！」

前までの静けさが嘘のように、洞窟内は賑やか声で溢れていた。

「うぇぇ……酔った……何故、妾がこのような事を……」

「珠さん、すみません。助かります」

「全くじゃっ！」

「タマちゃん、友達同士、助け合わなきゃダメなんだからね」

「それはお前が勝手に申し……待てっ！悪かった！！だから振るなっっ！！振らないでくれっっ！！」

沙詠は愚痴漏らす珠を振り回そうと、大きく振りかぶった。珠は慌てて沙詠を止める。

「沙詠ちゃん、せっかく手伝ってくれるのに可哀想だよ？仲良くし

たげて」

「はぁい」

「（沙詠……いつか覚えておれよ……）」

助け船を出した暁彦、しかし珠は沙詠の両手の中で密かに復讐を誓うのだった。二人と珠は祭壇の入り口から外へと出た。その瞬間、聞こえた。

―珠を奪わんとする者……この祠より生きて帰さん……―

「！！」

「えっ？」

「……？」

二人とひとつの珠にしゃがれた老人のような、奇妙な声が洞窟内に反響した。沙詠は暁彦にしがみつく。

「今のは……？」

「……面倒な事になった」

「えっ？」

暁彦が聞き返した瞬間にそれは起こった。

《ズンッッッ！！！》

大地が大きく揺れた。

「きゃぁぁあああッッッ！！」

「うおッッッ！！」

大地の大きな振動にバランスを崩して倒れそうになる。何とか両手を地面に付いて転倒を免れる。

「一体、何が……！！？」

「神官共め、最後まで下らない真似を」

苛立ちを込めてそう言う珠。とりあえずここを脱出するのが先決だった。

《ゴシャッッ！！》

「うぁッッ！！」

「きゃあああッッ！！」

暁彦のすぐ隣に落石が落ちた。地面を抉りながら落石は四散する。幸い四散した小石が当たったぐらいで大事には至らなかったが、命中していたら命はない。

「若造ッ！！走れッッ！！」

「くッッ！！」

珠が叫ぶと同時に、暁彦は沙詠を抱えて走り出した。大地の振動は止まることなく続き、上からは落石の雨霰。恐怖を圧し殺し、暁彦は駆けた。

「左じゃッ！！そのまま走れッッ！！」

珠の指示通り動く暁彦。珠は帰り道を知らないと言っていたし、本当に帰り道を教えてくれているのかもわからない。が、今は珠を信じて走るしかなかった。

「ハァッ！ハァッ！」

「うぇっ……ぐすっ……」

沙詠はあまりの恐怖で泣く事しかできない。珠の指示通り動く暁彦になされるがままだった。

「辛抱せいっ、若造ッ！！もう少しじゃッッッ！！」

「うッ！くぅッ！！」

心拍数が跳ね上がり身体が悲鳴を上げるが、分泌されたアドレナリンが暁彦を麻痺させる。そのおかげで限界以上に走り続ける事が出来た。珠が途端に叫ぶ。

「止まれッッ！！……何じゃとッッ！？」

「ハァッ……ハァッ……そんな、行き止まり……」

珠に案内され着いた場所は行き止まりだった。いや、良く見ると道があった形跡がある。しかしこの地鳴りの落石で道が塞がってしまったのだ。

「珠さん！！他に道はッ！？」

「生憎、妾は此処しか知らん」

「そんな……」

「えぐっ……ひっく……」

刹那。

《ゴゴゴゴッッ！！バキッ！ビキビキッッ！！》

「天井がっ！？」

「なッ！！？」

物凄い轟音が響きわたり、天井を見上げた。すると天上の岩に幾つもの亀裂が走っていく。もし天井の岩が崩れて落ちてこようものなら、暁彦達の命はない。

「（もし、天井が崩れてきたら……もう、引き返してる時間もない……。どうすれば……？）」

死が頭を過る。自分ではどうすることも出来ない事態に諦めざるを得なかったその時。

「若造ッ！！妾を投げよッ！！」

途端に珠が叫んだ。理解出来ない行動に暁彦は戸惑う。

「そっ、そんなことしたらッ！！」

「つべこべ言わず早くせんかッ！！」

《バキャッ！！！》

「！！？」

恐れていた事態が起きる。天井が崩れ、大量の岩が暁彦目掛け降ってきたのだ。

「死にたいかッッ！！！」

「！！」

珠の覇気の籠った怒鳴り声に暁彦は自棄になる。半ば放心気味の沙詠から珠を奪い、天上に向けて思い切り投げ付けた。

「どうにでもなれぇぇぇぇぇッッッ！！！」

暁彦の手を離れた赤い水晶は、淡く発光しながら天上へと飛ぶ。そして巨大な落石にぶつかりそうになった瞬間、珠は眩く発光した。その発光は洞窟内を照らし尽くすほど、暁彦と沙詠は目を覆った。

《パッッキャァァアアンッッッ！！！　》

珠は破裂し四方八方へと飛び散った。赤い欠片のひとつひとつが、きらきらと輝き降り注ぐ。自分が死ぬかもしれない窮地だったのにも関わらず、綺麗だと感じてしまった。そして砕けた珠から何かが現れる。

「……金色の、狐……？」

それは神々しい光を纏った大きな狐だった。ふさふさとした毛並み、一本一本の長い体毛が艶々と輝いて見える。二等辺三角形の尖った両耳とは対照的に、もこもこふわふわとした尻尾が優雅に揺らめいていた。

「クァァアアンッッ！！！」

狐は咆哮しながら大きく口を開けると、迫り来る巨大な落石に向かって、激しい紫電を吐いた。紫電は空気を切り裂き巨岩を貫く。

《ズガシャァァアアアンッッッ！！！》

耳をもぎ取られそうな轟音が鳴り響く。

「沙詠ちゃんッ！！」

「うっ！！」

暁彦は沙詠に覆い被さるようにして、降ってくるだろう落石に備えた。が、岩はいつまで経っても落ちてくることはなかった。

「ぅ……あれ……？」

恐る恐る見上げるとあの巨大な岩が綺麗さっぱり消えていた。大狐の吐いた紫電が巨大な岩を木端微塵に破砕していたのだ。

「天上に風穴くらい空くかと思うたが……久しぶりじゃからなぁ、力の制御が効かんわ」

口からパリパリと、微量の紫電を漏らしながら大狐は言った。

「むっ？あれは……そうか」

大狐はある事に気付く。先程、巨大な岩が落ちてきた天井。そこの岩の隙間から、明かりが漏れているのだ。大狐はニヤリと笑うと宙を蹴って駆けた。そして暁彦と沙詠の下へ音もなく着地する。

《ふわり。》

「……沙詠ちゃん、俺の後ろに」

暁彦は沙詠を自分の後ろへと隠す。いきなり現れた巨大な狐、暁彦は喰われてしまうんじゃないかと暁彦はひやひやした。

「すっごーいッ！！タマちゃんって大きな“ワンちゃん”だったんだーっ！！」

「戯けッ！妾は狐じゃッ！あんな人間に媚びる毛むくじゃらと一緒にするなッ！！」

暁彦とは正反対に大喜びする沙詠。黄色い瞳をキラキラ輝かせている。沙詠は動物が好きなのかもしれない。

「その声、もしかして……珠さん？」

「如何にも」

「えっ？あの、さっきまで珠で……あ、さっき割れたから……中から狐が？」

暁彦は信じられないことばかりで、頭はショート寸前である。軽く混乱していた。

「つまり、珠で狐なんです……」

「残念じゃが」

「あぅっ」

《ひょいっ》

暁彦が言い切る前に狐は言葉を遮り、沙詠の襟首をくわえて持ち上げた。

《ガシャッッ！！》

「！」

先程まで沙詠が立っていた位置に岩が落ちてきた。狐が引っ張らなければ、沙詠に岩が直撃していただろう。狐は沙詠を真上に放り投げ、自分の背中に乗せた。

「此処で悠長に話してはいられん、乗れ」

「ふわふわ〜っ！」

狐の上に乗った沙詠は、ふさふさの毛並みに大満足、撫でたり頬擦りする。

「えっ……でも……」

「早くせんかッッ！！」

「はいっ！！」

狐の剣幕に圧され、暁彦は慌てて背中に乗る。確かに感動するくらいの手触りだった。

「しっかり捕まっておれよッ！！」

「えっ……ちょっ、おわぁぁッッ！！」

「きゃあ〜っ！！」

狐は地面を強く蹴った。その速度と勢いに振り落とされそう　になり、暁彦は沙詠ごと狐にしがみついた。狐は宙を駆け、落下する岩を踏み台にして、どんどん上へと登って行く。暁彦は振り落とされないように必死だった。

「きゃはははっっ！！」

「たっ、たまっ！珠さんっっ！！てっ、天井はっ、いきっ！行き止

まりぃーっ！！」

「まぁ、見ておれ！」

暁彦の心配を他所に大狐は天井へと辿り着く。そして、大狐が目指していた場所を見付けた。

「（明かりが漏れる、岩の隙間……ここじゃッ！！）」

大狐は大きく口を開いたかと思うと、またもや口から激しい紫電を放出した。

《ズガガガガッッッ！！！》

「たっ！珠さぁぁああんッッ！！」

荒々しい紫電は岩壁にいとも簡単に大穴を開けた。発生した砂塵は外へと流れていく。狐もその大穴へと飛び込んだ。

「うっ……」

暁彦は砂塵で目を瞑る。肌に感じる空気が変化した気がした。

「……今宵は月が綺麗じゃ」

「……えっ？」

大狐の言葉で静かに目を開けた暁彦。そこに広がる光景に息を飲んだ。

「わぁ……」

「……本当、だ」

そこが空だと気付くのに時間はかからなかった。そこには星の海が広がっていたのだ。大きな満月と小さな星達が、夜空というキャンパスに散りばめられ、鮮やかに彩る。来る前の大雨が嘘のような快晴だった。狐が開けた岩肌は屋敷裏の山頂に繋がっており、空へと飛び出したのだった。

「三百年の歳月が流れても、空だけは昔と変わらぬ」

懐かしむように、けれど切なそうに、一言そう呟いた大狐。暁彦はその時、大狐が何故か寂しそうだと感じた。大狐はその夜空を惜しむように、空を幾分か舞っていた。沙詠がきゃっきゃっと喜んでいたから、気を使ってくれたのかもしれない。大狐は原っぱへとゆっくり降り立った。

「タマちゃんっ！もういっかい、もういっかいぃ～っ！」

「い、生きてる……」

地面に着地するやいなや「もう一回」とねだる沙詠。それに比べ暁彦は放心状態だった。

「……えぇいっ、さっさと降りぬか」

「わぁっ」

《ドサリ……》

中々背中から降りようとしない二人を、狐はうざったそうに振り落とした。暁彦は沙詠を抱えたまま地面へと落ちる。

「いたた……何も振り落とさなくても……あれっ！？」

「……タマちゃん、いないです……」

今さっきまで、もこもこふわふわの背中に乗っていた筈なのに、狐の姿は綺麗さっぱり消えていた。

「幻……だったのか……？」

「そんなわけないですっ！タマちゃんはさっきまでそこにいましたっ！」

沙詠は小さい拳を振り回しながら、精一杯否定する。今にも泣き出しそうな表情の沙詠、暁彦は優しく撫でた。

「沙詠ちゃん、そうだね。珠さんは照れ屋さんだから、きっと先に帰っちゃったんだね」

「うん……でも、また、会えるかな？」

「うん、すぐ会えるよ」

「本当っ！？」

暁彦の言葉を聞いて安心したのか、沙詠は笑った。信じられないことばかりで夢だったのかもしれないと思う。だが、見て、聞いて、

感じたあの瞬間は決して嘘ではなかった。暁彦は強くそう思うのだった。

「さっ、帰ろっか？」

「はいっ……あ、あれ？」

沙詠の膝がガクガクと震えていた。今になって、疲れが押し寄せてきたのだろう。今日は色々な事が有り過ぎた。暁彦は沙詠に歩み寄ると、背中を向けてしゃがみ込んだ。暁彦が沙詠をおぶると言うのだ。

「さぁ、掴まって」

「あのっ、でも……」

「それじゃ、歩けないでしょ？いいから」

沙詠はおずおずと暁彦の背中におぶさった。沙詠は軽いので暁彦は難なく持ち上げることが出来た。

「ご、ごめんなさい」

「いいのっ、いいのっ。さっ、屋敷に帰ろう」

「はいっ」

暁彦の首にきゅっと手を回す沙詠。暁彦の背中が大きく感じられた。

「タマちゃーんっ、ありがとーっ！またねーっ！」

どこかで聞いているかもしれない狐に向かって沙詠は叫んだ。そんな沙詠を背中におんぶしながら、暁彦は屋敷へと戻った。

「そんな大声出さぬとも聞こえておるわ」

木の枝の上で、沙詠と暁彦の二人を見送る人影。月明かりにその姿が晒される。

「社から出るつもりは毛頭なかったんじゃがな。助けた成り行きとは言え、どうしたものか」

女だった。しかも、息を飲むほどの美しさだった。足下まである長い金髪が、月明かりにキラキラと反射する。まるで江戸時代の姫君のような、鮮やかな着物を身に付け不敵に微笑むその姿は、誰をも虜にしてしまうだろう。そして頭部から覗く尖った対の獣耳とふわふわもこもこの尻尾。それと、彼女はなぜか目を閉じたままだった。

「これも何かの因果なのかもしれぬ」

女は一言呟くと闇に消えるように姿を消したのだった。

◇　◇　◇　◇

それからしばらくして、屋敷に着いた頃には朝になっていた。暁彦

や楓以外にも、昼夜を問わず沙詠を探し続けてくれた人達がいて、早朝にもかかわらず温かく出迎えてくれた。沙詠はその頃、暁彦の背中でぐっすりだったが。

「沙詠ッッ！！」

「楓さん、大丈夫。疲れて眠ってるだけ」

沙詠が帰ってきたと聞いてすぐに飛んできた楓。目元が赤いのは、眠れなかったからだろう。

「本当っ、に……心配させて……この娘ったら……」

「すぅ……すぅ……」

暁彦の背中で眠る沙詠の頭を撫でた。ぽろぽろと涙を溢す楓だが、彼女の表情は笑顔だった。

「良かっ、た……本当に、良かった、です……うぇぇっっ！！」

「葉月まで泣く必要はないだろう？沙詠は無事だったんだから」

葉月と椿も起きていたのだろう。泣き叫ぶ葉月を椿は優しく宥めた。

「暁彦も良くやったな、お疲れ様。お前も疲れただろう、話は後で聞く。ゆっくり休むといい」

「ありがとう、椿さん。うん、そうさせてもらうよ」

今まで気丈に振る舞っていた暁彦だったが、屋敷に着いて安心した

のか、どっと睡魔が押し寄せていた。「今日はもう休め」と椿が気を使ってくれた為、暁彦は沙詠を楓に渡すと自室へと戻った。ベッドに入ってすぐに暁彦は意識を失った。

―が、……たの？―

―だよ、……さんて言うの―

「ん……」

どのくらい時間が経ったのだろうか、暁彦は誰かの話し声が聞こえた気がした。

「お姉ちゃん。この人こわくない？」

「兄さんは大丈夫だよ、すごくやさしいんだから」

「（あれ、この声……？）」

聞き覚えのある声にうっすらと目を開けると、見知った顔が視界に入る。沙詠と沙癸だった。二人はまじまじと暁彦の顔を覗いていた。

「あれ……沙詠ちゃんと、沙癸ちゃん……？」

「ッ！？」

「さきちゃん、そんなにこわがらなくても大丈夫だってばぁ」

起きた暁彦と目が合うと、沙癸は直ぐ様沙詠の後ろへと隠れた。それでも気になるのか、沙詠の後ろからひょっこり顔だけ覗かせていた。暁彦はベッドから上半身を起こす。

「おはようございますっ……ってあれ、もう“こんばんは”かな？」

「（“こんばんは”ってことはもう夜か？あら、外も暗くなってら）んーと、ふたりともどうしたの……？」

ボサボサの頭を掻きながら、重い瞼をこじ開ける。

「かえでお姉ちゃんに、『“兄さん”をおこして来て』って言われたんです」

「そう、ん……『兄さん』？それって、俺の事？」

「あっ、はい……そう呼んじゃ……だめ、ですか？」

沙詠の潤んだ瞳と上目使いの視線。暁彦は兄性本能を擽られる。

「いいよ、沙詠ちゃんの好きな様に呼んでくれて構わないから」

「はいっ、兄さんっ！」

暁彦がそう言って微笑むと、沙詠も嬉しそうに笑った。

「わ、わたしもっ！わたしも“お兄ちゃん”って呼ぶ！」

「うん。いいよ、沙癸ちゃん」

沙詠に対抗心を燃やしたのか、沙癸もそんなことを言う。暁彦は沙詠と同様に微笑んで答えた、沙癸も嬉しそうにする。

「兄さん、早く行きましょう？」

「行くって、どこに？」

「食堂ですっ」

グイグイと暁彦の腕を引く沙詠。何故、彼女が食堂に連れて行こうとするのか、暁彦には心当たりがない。急かされて渋々立ち上がった。

「早く行くのーっ！」

「わっ、ちょっと待って……」

もう片方の腕を沙癸に掴まれた。沙詠と沙癸に急かされ引っ張られ、暁彦は食堂へと連行された。そのまま、食堂の入り口へとやって来た。

「みんな、まってますから」

「『みんな』って？食堂で何かあるの？」

「早く入るのーっ！」

「えっ、ちょっと」

何もわからず、食堂へと押し込まれた。ふたりも暁彦の後に続いて入る。

「あれ、どうして真っ暗なんだ？」

食堂は明かりが消され真っ暗だった。少なくとも常夜灯は付いている筈なのに、それさえ点灯していないのは不自然だ。と、思っているうちに、突然明かりが点灯した。眩しさに目を覆った暁彦。

《パンッ！パンパンッ！》

「沙詠ちゃん沙癸ちゃん楓さん、ＨＯＥにようこそーっ！！」

「えっ……これは……？」

そこにはクラッカーを手にした、ＨＯＥの面々が集まっていた。状況を飲み込めない暁彦に葉月が駆け寄ってくる。

「すみません、暁彦様。みんなで楓様達の歓迎会をしようって事になって。暁彦様にも相談しようと思ったんですけど……気持ち良さそうに眠っていたので……」

「お前なら賛成してくれると思ってな。悪いが勝手に決めさせてもらった」

申し訳なさそうにする葉月をフォローしながら椿が言う。どうやら、楓さん達の歓迎会を企画したらしい。

「これから一緒に生活する仲間がやって来たんだ、これぐらいしても問題ないだろう？」

「ああ、もちろん！みんなさすがだねっ！」

暁彦の笑顔を見ると、周りも安心したのか微笑んだ。

「さぁさぁ、今日は沙詠ちゃんと沙癸ちゃんが主役ですよ」

「えっ……わたし？」

「わーいっ！」

沙詠と沙癸も不思議そうな顔をしており、自分達の歓迎会だとは知らなかったようだ。しかし、茉奈にパーティー主役帽を被せてもらうと嬉しそうに喜んだ。心配したほど人見知りもなく、楽しんでいるみたいだ。

「楓も、はい」

「ありがと」

華恵に主役帽から主役帽を受け取る楓。

「何してるの、華恵ちゃんもだよ？」

「あっあたし！？なんでっ！？」

何故か華恵も、葉月から主役帽をもらい困惑する。

「この前、華恵ちゃんの歓迎会出来なかったでしょ？だから今回、華恵ちゃんの分も合わせて……なんか、取って付けたみたいでごめんね？」

「ううんっ、そんなことないっ！すごく嬉しいよ、ありがとうっ！」

満面の笑顔で嬉しさを現す華恵。葉月の気持ちはしっかりと華恵に伝わっていた。

「さぁーって！宴だぜっ！！トシっ！準備出来てるかっ！？」

「うん、ばっちりさ」

「ったく……おめぇら、ただ飲みてぇだけだろ？」

一升瓶を片手にわいわい騒ぐ茂雄と俊樹、それを見て溜め息をつく春実。でも三人とも嬉しそうだった。

歓迎会も終盤に差し掛かった頃、暁彦は食堂のテラスに佇んでいた。

「（良かった。楓さん達、楽しんでくれてるみたいだ）」

皆と楽しそうに会話する楓や、デザートを幸せそうに頬張る沙詠と沙癸。彼女達を見ながら暁彦はそう感じていた。ふと、視線を外へ

と移す。そこには昨日と同じ綺麗な夜空が広がっていた。

『三百年の歳月が流れても、空だけは昔と変わらぬ』

「（あれは夢じゃなかったんだよなぁ……？）」

暁彦は昨夜の出来事を思い出していた。屋敷から洞窟へ瞬間的に移動したことも、その洞窟で巨大な狐に出会ったことも、全ては夢だったのではないかと思う。しかし、視界に映る景色、肌で感じた空気、記憶そのものがそれを現実だと認識させていた。

「（未だに信じられないけど……）

あっ」

突然、視界が何かに覆われた。

「だ～れだっ？」

触れて伝わる温もりと後ろから聞こえる声。誰かの手が暁彦を目隠したのだ。この声には聞き覚えがある。

「……楓、さん？」

「あったりー」

声と同時に視界を覆っていた手が外される。振り返ると、そこには案の定、楓が立っていた。

「隣、良いかしら？」

「どうぞ」

「ありがと」

少し端に寄って、楓に場所を譲る暁彦。楓は礼を言うと、暁彦の隣へやって来た。

「……綺麗な星空ね。都会じゃ、まず見れないわ」

「昨日もこんな夜空だったんですよ」

「そうなんだ」

楓は酒を飲んでいたらしく頬をほんのり赤くしていた。そっと前髪を掻き上げる彼女。暁彦はそんな女性らしい仕草に見とれてしまう。

「暁彦くん」

「は、はい？」

「沙詠を見付けてくれて、本当にありがとうございました」

「えっ……」

突然、頭を下げる楓。暁彦は困惑する。

「ちょっ、ちょっと待って！！頭を上げてくださいっ！！」

「暁彦くん、本当っに……私っ、沙詠が……見付、かって、なかっ、たら……」

「わっ！！」

頭を上げた楓、それを見て驚く暁彦。何故なら、楓の目には涙が浮かべられていたからだ。

「楓さん、泣かないでっ！！大丈夫ですよっ！だって、ほら沙詠ちゃん無事見付かったんだしっ！！」

「暁彦っ、くんには……何て、お礼っ言えば、いいかっ……」

「いや、そんなっ！！いいですからっ！！実際、俺何もしてないしっ！！」

「それでもっ……私っ……」

泣き出してしまう楓。さっきまでオロオロしていた暁彦だったが、何故か楓を見て微笑んでいた。

「楓さん、俺さ……楓さんみたいな人がいてくれて、嬉しいです」

「えっ……？」

不思議そうな瞳を向けた楓。暁彦の微笑む顔が瞳に映った。

「沙詠ちゃんや沙癸ちゃん、楓さんを見ていて思ったんです。本当の“家族”みたいだなって……」

「暁彦、くん……」

亜人種差別は未だ根強く残っている。その恐慌の中でも、亜人種を認めてくれる人がいる。暁彦はそれが嬉しくてたまらなかったのだ。

「沙詠ちゃんと沙癸ちゃんの懐き様や、楓さんが必死に沙詠ちゃんを探す様子。まるで親子の様でした」

「……そうね、私も、そう思ってる。沙詠や沙癸にも、そう思ってもらいたい」

「それは大丈夫ですよ、ほら」

暁彦が指差す方向を向くと、二人の少女が元気よく駆け寄って来るのが見えた。

「「かえでお姉ちーゃんっ！！」」

沙詠と沙癸だった。楓の下へ駆け寄ると、ケーキを乗せた皿を差し出した。

「このケーキ、すごくおいしいよっ」

「お姉ちゃんも食べて食べてっ」

「沙詠……沙癸……」

無邪気に笑う少女達、こんなにも慕ってくれる彼女達。それは楓の愛情がしっかりと彼女達に注がれていた事を意味していた。楓は少女達をそっと抱き寄せる。

「お姉ちゃん、泣いてるの……？」

「あーっ！お兄ちゃん、かえでお姉ちゃんをいじめたでしょー！？」

「えぇっ！！」

驚く暁彦、いつの間にか悪役にされてしまった。

「ち、違うわよ、沙癸」

「ちがうの？」

「うん。ただね、嬉しかっただけなの。沙詠と沙癸が、私の事“お姉ちゃん”て呼んでくれることが……」

沙詠と沙癸の頭を愛おしく撫でる楓。目を細めて気持ち良さそうに頭を預ける。

「沙詠、沙癸。いつまでも、お姉ちゃんの傍にいてね」

「うん、お姉ちゃんっ」

「お姉ちゃんも、ずっとそばにいてね」

「うんっ」

「（楓さん、あなたの娘達は、あなたの愛情でしっかり育っていますよ）」

寄り添う三人の姿を見ながら暁彦はそう思った。

「暁彦くん」

名前を呼ばれ、視線を送る暁彦。

「ありがとう」

笑顔で再びお礼を述べた楓に、暁彦も笑顔で返した。

「どういたしまして」

その日、ＨＯＥに新しい仲間が加わった。ふたりの仔猫とその母親。仔猫達は内気だが、母親や仲間の優しさに包まれすぐに打ち解けるだろう。ＨＯＥの名前通り、ここに住む者達に末永く幸せが訪れますように。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2312m/

Happy of establishment

2010年10月11日04時44分発行